
願いの先、想いの行方

御陵一茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いの先、想いの行方

【Nコード】

N8098G

【作者名】

御陵一茶

【あらすじ】

悲劇は起こった。【紅き雨の惨劇】後にそう呼ばれるようになる事件。二百万を超える人々がたった一日で死を運ばれた。大陸全土を震撼させ世界を深い悲しみに陥れる。それから一年が経ち人々も少しずつその哀しみから抜け出そうとしていた。忘れない、許せない、先へ進みたい、止まっていたい……………様々な思惑が行き交う中、それでも世界は変容していく。そして、物語は動き出す。四つの歯車が絡み合い、ギリギリと音を立てゆっくりとだが確実に回っていく。あの【紅き雨の惨劇】は少女少女たちの運命を大きく

狂わせ、破滅へと向かわせていく……

惨劇 はじまり

鉛色の空は見渡す限り広がって、雨粒を流していた。

見るも鬱なその景色はほとんどの者につい視線を下げさせてしまうだろう。

曇天を仰いで“晴れて欲しい”と強く願ったとしても決してその雨雲を払拭することかなわず、ただ無情で冷酷な雨の雫に打ちひしがれる

崩れた建物、えぐれた地面、潰された食物、千切れた植物……

動くことなく、壊れてしまった人……

いくつもの壊れたモノが地に張り付き、赤い液状を流していく

上に鈍色があるならば、下には紅色が広がっている

本来ならば赤がこんなに広がることは有り得ないことであるが、雨のせいで薄まり伸び倍以上に至る。

そんな壊滅、凄惨的な光景の中、赤い溜まりの上に浮かんだよう、人が立っていた。

涙を流している。

果てしてそれは“涙”なのか？

雨がただ頬を伝っただけかもしれない。

だがそれを雨の雫と言うことが出来なかった。

表情、そこで彼が男性だということに気付く。

この世を厭う顔。

全ての悲しみを背負い、生きることを感じられない死にいく者の絶望。

嗚咽こそ聞こえないものの、涙を流さずしてこのような表情など作れやしない。

ふと、彼の身体が動く。

ぎこちなく、機械のように、ゆっくりと重い腰を上げるように背を向けている方向へ首を動かした。

瞳に映ったのはこの曇天にもかかわらず、太陽を思わせる赤黄の髪を伸ばした女性が足を引きずり、右手をぶらつかせ左手があらぬ方向へと曲がっていた。

全身には無数の切傷や、内出血の皮膚、血に染められた身体。

そして、有らん限りの憎悪を男性に向けている。

恐らく女性は美しい容姿をしているはずだった。

何故、“だった”か？

その顔を見れば、その憎しみを孕んだ目を見れば、彼女が他者を畏怖させる顔つきになっているのは一目瞭然。

男性は何も言うことなく、うつ向いていた。

怒号の叫びが耳に入っても彼は微動だにしない

そこで彼がうつ向いていたのではなく、何かを儚げに見つめていたのがわかった。

その腕に眠る赤子を抱いて、これ以上ない深い愛情と共に哀しみを露にしている

叫びはもはや金切り声となつて、今にも斬りかからんとする女性がいるのに、彼は自分と赤子だけの世界にいた。

寢息を立て、すやすやと可愛らしい赤子を少しだけ強く抱く。しかし、決して起こさないように

怒り狂う女性はだがしかし動くことが叶わない。

立っていることすらままならない身体は声を出す度に体力と氣力を奪っていく。

ふらり、と堪らず膝を着いてしまう。

彼女は全身を鼓舞して、むち打ちながら立とうとする。

が、それ以上に血を流し過ぎていた。

霞む景色、歪む視界、消えいく意識。

目線が下へと落ちていく。堕ちていく、堕ちていく……………

振り絞る力で彼女は最後にこう言った

「レイン。許…さない、貴様を…絶対…に…………」

レインと呼ばれた男性はそれを聞いてなお表情を崩さず、赤子だけを見つめていた。

すぐ近くに剣が地に刺さっている。

そして、そこにあつたのはあの女性にとっては耐えられない……

彼女の生涯の友たち。

彼女の愛する男。

彼女の守る人々。

あまたの死体が彼女にとって大切な人たちであつた。

その場にいるのは彼、レイン・エリシオンと

彼が抱く赤子だけだつた

蒼眼 であい

澄みきつた空、雲一つなく晴れ晴れとした蒼天が瞳に映る。

見渡せど見渡せど続く蒼。

空はどこまで高く深いのだろうか、何故ここまで蒼に満たされているのだろうか…

そう言わざる得ないまでに、今日の青空の景色は目を見張るものであった。

「ああ…暇だなあ」

だが、口に出た言葉は全く関係のないことで、自分自身何を馬鹿なと笑う。

「こんなキレイな景色をばあつと見る……幸せなことだな。平和な証拠でもあるし」

物足りない。

彼の思いは心底物足りなさに溢れていた。

不満があるわけではない

今の生活は十二分と言わんばかりに満たされているし、誰もが親切、親身である。

文句などつけては罰があたるというものだ。

にもかかわらず、彼の心は鬱々としたもので、退屈でもあった。

「退屈なんだよなあ…本当に」

溜め息一つつく。

その時、離れた所からよく響く声がした。

「おおい！レックスウ！」

よくそこまで声が出るな、と少年レックスは毎度のことながら思っ
走ってくる少年が自分の元に辿り着くの待ち、それを見据えて面倒
くさいように装う。

「んだよ、ロイ」

ロイと呼ばれた少年は乱れた息を整えるのに時間がかかり、また焦
っているのか

「はあ、さつき！村に、来た…はあ…んだ」

村に来た、と言われても頭には疑問しか浮かばない。

それが何だと。

こんな田舎村ではあるが、貿易商や旅人の抛り所ともなっているの
で、来客など珍しいわけではない。

「ちが、ちが…ぶはっ」

なお取り乱しながら呼吸がままならないロイをとりあえず落ち着か
せる。

「まま、落ち着こうぜ？全然わからんから」

「あ、ああ……」

それからしばしロイは地面にぺたりと座り、すぐに横になって空を
仰ぐ。

ロイはとりわけ運動が出来るわけではない、むしろやや太り気味な
体型なので人より劣ってしまう。

対してレックスは村の子供の中でずば抜けて運動神経がいい。

二人は生まれてからの親友で、そのことについてレックスは全く気
にしてはいない。

「で、何だよ？」

「あ！そくだ、レックス！」

突然、ロイは顔を緩ませてにんまりと笑った。

「うわぁ……」

つい一歩退いてしまう。

「おい！何でヒク！」

「いや、あんまり変な顔をされては」

「悪かったな！」

ロイは顔を明後日の方向へと向け、わざとらしい程に怒りを露にしている。

いつものことだった。

「じゅめん、ごめん」

「……………ったく、人がせつかく面白い話を知らせてやろつと…ブツ
ブツ」

刹那にしてその一言に反射したレックス。

「面白い話だつて!!」

ガシッとロイの腕を掴み、今度はレックスの顔が先程のロイのよう
になっていた。

「なあなア！面白い話つて何だよ」

「聞きたいか？」

ニヒルに笑うロイ。

格好をつけてはいるが、ロイも話したくてうずうずしている。

だが、レックスにはそんなことはどうだっていい。

ロイが言う面白い話にハズレはなかった。

今までの体験から確実だ。

「いよし！聞いて驚けよ！なんと…」

「うんうん！」

もったいぶりを見せる。

それもまたレックスの期待を膨らませていく。

「それは、だな」

「早くしてくれよッ！」

ごくり、と喉が鳴る。

いよいよロイから話が出てくる。

目が見開いてしまう。

「ローゼスから騎士様がこの村に来ている…！」

「ッ…！」

世界がぐらつく。

頭を強く殴られたように、身体がふらつき鼓動がドンドンドン

と高鳴る。

ロイの言葉が聞き間違いではないか、と疑念が上がるが、生憎様あいつは嘘をついたりはしない。

ならば、答えが導かれていく。

それが求まった時には身体が勝手に走っていた。

「あつ、レックス、待てよお！ひい、早えよ…」

舌を出してしんどそうな顔でノロノロとレックスの後を追う。

澄み水の村、リナール。

人口300人足らずの小さな小さな村。

自然主義のため、発展を良しとはせず
ただつつましかに、ゆつくりと時の流れに身を任せる。

簡素で貧富の差はなく、名の通り水が澄みきっていて、作物が良く育つ。

ただそれだけの村。

レックス以外の住民はこの生活に満足し、この村をこよなく愛していたし、若者たちも自ら村を離れようとはしなかった。
外に興味はあったが、何よりリナールに立ち寄る客人たちの話を聞き、いかにリナールが良い場所かを改めて知るほど。

しかし、レックスにとっては平和で退屈な村。

だからこそ客人達の話はレックスの好奇心を駆り立てた。

そんなリナールだが、前述したように多くの人々が立ち寄っている。

にもかかわらず未だ騎士という者が訪れたことはなかった。

それもそのはず。

リナールは平和だからだ。

騎士とは民を守る者。

あらゆる危険因子から、民の剣となり盾となる存在。

危険因子、リナールには当てはまらない言葉。ゆえにリナールに騎士が訪れることはないと思っていた。

だが、やっと、やっと来てくれた。レックスにとってこの上ない吉報。

村に着くと、直ぐ様騎士がいるというのがわかった。
囲むように人垣ができているのだから。
早まる鼓動を抑えて近づいていく。

集まっていた人々は騎士を一目見たいのだろう、好奇の眼差しをしている。

レックスは一心にその人垣をかきわけける。

「おう、レックス！てめえも騎士様のお顔を拝見してえのか」

そう言うと、気の知れた大人がレックスの隣で一点を見ていた。そして、啞然とした顔へと変貌していく。

身長が低くてレックスはその場で騎士を見ることが出来ないので、さらにかきわけて進む。

だんだんと人が視界から消えていき、やがて、一番前へと辿り着く。

そして、言葉を失った。

「……………」

目の前にいた。

騎士様が。

それは想像とは遥かにかけ離れていたのが事実。

「これは騎士様。こたびはご来訪、心よりお礼申し上げます」

「堅苦しい態度はお止め下さい、村長殿。それより詳細を」

「それは……ここでは憚れます。また後程でよろしいでしょうか？」

「…了承しました。では私は周辺を散策して参ります」

「わかりました、お気を付けて」

村長と会話をしていた騎士からは女性らしい、透き通った声だった。レックスは彼女に釘付けにされていた。

容姿が余りにも美し過ぎた。絵画から出てきた理想的な女性の姿そのもの。

余りにも麗しき容姿

輝く金糸の長い髪

どこまでも深い蒼の瞳

女性でありながら、その背丈は170を越え

騎士でありながら、露出のあるスカートから伸びる白く細い脚線。

蒼と黒のドレスを基調とした騎士の着る装束が、彼女をより艶めかしさを上げていた。

一体どのくらい時を失っていたのだろうか。

世界の中で自分一人だけが静止してしまったかのよう、全身が麻痺している。

不意に、彼女がこちらを振り向いた。

「！！！」

視線が交わり、その蒼に満ちた瞳がレックスを捉えただけで彼は痺れきってしまう。

「……では、失礼します」

表情崩さず囲まれた人垣から出ようとする

誰しもがさも当然と言わんばかりに彼女に道を開けていく。

決して皆は彼女の姿から目を離すことなく

女性までもが心を奪われているのだから。

普通であれば、美しい容姿とは一見して目を奪われるものであるが、彼女は違う。

見れば見る程に焼きついていくのだ。

「はっ……！」

気が付いた時には既に彼女は立ち去っており、姿が消えてなお余韻

は残る。

「おいおい、騎士様ってのはあんな美人ばっかなのか」

「キレイ……あんな風にわたしもなりたいわ」

「……………ヤベエよ!!」

次に起きたのは彼女についての容姿に人々はざわめき始める。

と、そこに

「ぶふう…………ゼエゼエ…………レッ、クス…はっ…どうだ、ったよ？」

ロイの言葉など耳に入って来なかった。
レックスの視線は彼女の去って行った道をずっと追っていた。

「なあなあ、どうだったんだよ！」

「……………」

「おい、レックス？大丈夫か？」

左右に手を振っても何の反応もない。
完全に心ここにあらずの状態

「ああ、ダメかあ……しゃあない、他に聞いとこつ」

もはや何をしても無駄だと踏み、レックスの元から離れて騎士の容姿を聞きに回っていった。

残されたレックス。

「……あ、れ、が騎士様……………ッ！…こんなことしている場合じゃねえ」

そこで我に返る。

何かを思い立ったようで、彼は即座に彼女の後を追うために駆けた。

「はあ、はあ……」

村から外れる森の中

小さい頃 と言っても5、6年前 はよく遊びに行っていたが、今
となつては久しく感じてしまう。

随分と遠い昔のように思える。

地理を把握していると、自分ながらに自負していたつもりだったが
如何せん

「参った、迷った……」

この森はなかなか広いため、小さい頃はこんな奥に来たことがないのもあったが

それ以上に彼女を夢中で追いかけていたのかと若干恥ずかしくなる。

「はああ、しょうがない。とりあえず歩いてみるか」

立ち止まって思案しても仕方ないので、真っ直ぐに進む。

時刻は夕方に近くなっている。

いくら馴染みの場所でも夜の森は勘弁してほしい、率直な思いを抱く。

「騎士様あ！どこですかあ！いるなら返事してくださいさああい！」

当てもないので、呼んでみても返事など返ってくるわけもなく

「見ず知らずの他人に呼ばれても、普通は返事なんてしないか」

苦笑した。

そして再び彼女の姿を思い起こす。

言葉で言い尽くせないほど、彼女の全てがレックスには衝撃的だった。

村にも一応、美人という部類の女性はある。

だが、次元が違う。

月とスッポン、たまらずそんなことを思っにやけてしまった。

「綺麗だったなあ、あんな人がいるなんて…世の中は広いもんだ」

忘れられない姿。

頭の中にその映像を流しながら、進んでいく。

「ああ、これが一目惚れなのだろうか。俺は恋をしてしまったんだ」
「」

なんてことだあ

その場で一人悶えながら叫ぶ。
顔がとても熱い。

「騎士様…そうだ！名前、名前は何ていうんだろ？」

あの時、村長に聞いておけばよかったと悔やむが
よくよく考えて村長が知っているとは限らない。

ならば、

「絶対に会って名前を聞いてやる！」

益々彼女に会う意思が強まる
ずんずんとさらに進む。

しばし進んでから視界にある人物が入ってきた。
条件反射で足に力が入って速度が早まる。

間違いない。

あの姿は

「騎士さ…」

瞬間、レックスの横に高速で物体が飛んでいった。

風がレックスの顔を撫でる。

過ぎ去った時に、叩きつけられた音が大きく鳴った。何が起きたのか、訳も分からず後ろを振り向いてみると

「な、な、な」

横に過ぎた物体は人だと理解してしまう。

樹々にぶつかり、折っていったのだろう多くの樹が倒れている。

とりわけ大きい樹がその速度を受け止め、人がそこにへばり付いていた。

普通ならば確実に死ぬ。

恐ろしさにレックスの身体が震えた。
汗がだらだらと垂れてくる

「ひ、人、人が」

声を出すこともままならないまで、動揺と恐怖を隠すことができない。

冷静さなど吹き飛んでいた。

「あ、あ… ああ」

腰が砕ける、足に力が入らなくなる
呼吸が、できなくなる。

「なんだよ、何だよ、コレ」

血が滴っている。

樹より沿って垂直下に流れる血は、人の証拠である赤い血だった。

おびただしい程の出血量。

見ただけで、胃から消化物が一気に逆流してこようとする。
それを堪えて、胃液の酸っぱい味と鼻にツンとした匂いから涙が出

てきた。

レックスは顔をそらす。

余りにも自分には辛すぎる光景だった。

今なお吐き気が止まることなく、食道をさまよっている。

ゆえに背後に人がいたこと、最初に探していた人のことなどすっかり忘れていた。

「何を、しているのですか？」

冷たく、内に怒りを感じる声色。

ビクッと肩が震えて、恐る恐るに背後に立つ人物を見た。

「あ…あ、き、し様」

そこに彼女はいた。

戦慄、全身が針を刺したように肌が痛い。

何故か、彼女が彼女だと理解しきれない。

表情が、雰囲気がレックスの見た彼女と全く違っていただけだから。

この女性は誰だ。知らない、知らない。
頭が否定し続ける。

しかし、彼女はぺたりと座り込むレックスを見下ろし

「村の者か？私を追って来るとは愚かなことを」

彼を庇うようにして前に立ち、樹にへばり付いている者を睨んでいた。

「起きなさい、貴様の芝居など三流にも及ばない」

「……………く、くけ、クケケケ」

人ならざる笑い声、いや、笑い声なのかどうかすら分からないが、それは獣の鳴き声とも言える。

次に異変が起きていた。

身体のおちこちが膨らみ曲がり変形する。

嫌な音を立てて、急激に姿が鳥の形へと露になった。

「貴様の罪は最早救い為すこと不可なり。資本家、ダリウス・コーベル・スコットン。さあ、執行の始まりです」

彼女の手に一瞬にして剣が持たれる。

どこから現れたのか判らないが、手には剣が存在している。

構える騎士。

対峙する異形の怪物が翼を広げて地面すれすれに飛行。
人よりも明らかに速いスピード。

まず間違いなく常人ならば、そのまま鋭い嘴に貫かれてしまう。

だが、彼女は特に臆することなく剣を振りかぶり

「ケエエエ!!」

「はあああ!」

怪物の嘴が騎士の身体をかすめることなく、また、騎士の剣が怪物の足を根こそぎ斬り伏せた。

転がる怪物。

痛みの余りに嫌悪する金切り声を上げているが、相変わらず騎士は冷淡に見下ろしている。

血が流れる。青い青い血が。
そこでレックスの意識が完全に覚醒した。

「あ、青い血…」

「奴らは人では無いのです。青い血は何よりの証拠」

呟いたはずの言葉は、離れた彼女から反応が返ってきていた。思わず、レックスは叫ぶ

「何なんだよ、アレは」

反応はもう返って来なかった。

怪物が動いていたから。

羽ばたいて空へと高く上昇している。

高度に至るとそのまま騎士から逃れようとする。

「うふふ…私から逃げようとは、愚の骨頂！」

レックスは見た。

騎士の手から剣が刹那にして消え、代わりに槍が握られていたのを。いつの間に、という言葉が発そうとした時

彼女の槍が勢いよくその手から投擲されていく姿と驚異的なスピードで放たれた空を切る音と

数秒も経たずして身体を貫かれた怪物の叫び声が聞こえた。
一瞬の出来事。

余りにも衝撃的で、余りにも現実離れの出来事だった。
レックスは呆然としたままで、目線が変わらない。

隣を過ぎていくのが感じた。

落ちた怪物の元へと行くのか、騎士は確かな足つきで歩み始めている
ハツとする。

気付いた時にはレックスは騎士の後ろを付いて行った。

「……………」

「……………」

騎士は何も言わず歩き、レックスはおずおずと騎士の様子を窺っている。

ぴたりと立ち止まり、間近に怪物がいることを確認できた。
凝視するとまた、吐き気が催される。

構わず騎士は槍を引き抜き、どこかへと消し去ってしまう。
そして、振り返り

「お怪我はありませんか？」

柔らかな表情と気遣いの声色で話しかけられる。

先程までとは違う、レックスの思う彼女だった。

不意に顔が熱くなってくる。

緊張して上手く声が出せず

「だひジョーブです！」

上擦ってしまった。

恥ずかしさに余計顔が上気する。

その様子を見て、胸を撫で下ろして

「そうですか。よかった、とても安心しました」

優しい微笑みを向けてくれていた。

「……………ブッ」

そこでレックスの意識は途絶えていた

木目の見える天井。

木の匂いが心を落ち着かせ、頭が冴えていく。

ゆっくりと起き上がり、辺りを見渡す。

自分の部屋。

両親のいないレックスはロイの家に住まわせてもらっていた。

と言ってもロイの家は宿屋を経営しているので、その一部屋を使わせてもらっている。

勿論、感謝してもし足りないのが事実。

ベッドから出て、部屋をも出ると微かに隣の部屋から話し声が聞こえた。

普段は特に気にせず通り過ぎるのだが、会話する二つの声にはどちらにも聞き覚えがあった。

何より片方が透き通った静かな声なのと、片方がよく響くこの村で一番馴染みのものだから

「これは…ロイと、ま、まさか！騎士様」

ドアを開けることも出来たが、何を思ったのかレックスは耳を当てていた。

「いやあ、それにしてもレックスも馬鹿ですねえ」

「そう言わないであげて下さい。きっと森の中を迷い果てて疲れていたのでしょう」

「とは言ってもね、ぶふ……鼻血ブー、って何があればなるのか」

「それは私にも分かりませんね」

「アイツはむつつりなんスよ」

バンッ！

「ロイ、お前に死を与えてやろう！」

ドアを開けた瞬間、ロイの視界に入ったのは般若の形相をしたレックス。

プルプルと震える身体を見て、怒りを露にしているのがわかったし、何よりも今の会話が聞こえたいた

そう考えた時、既に遅く

ロイは羽交い締めにしてぐるぐると回し始めた。

「や、やめ、やめ」

「ギヒヒ、苦しめ、苦しめえ！俺が受けた屈辱を今こそ晴らす時じや」

「ちょ、お、おえ…気持ち、ワル」

加速する回転。

にたにた笑うレックスをよそにロイは青ざめた表情になりかけている。

「オラオラ、まだまだだあ！」

「ヒイヒイヒイ……」

「うふふ、面白い方たちですね」

この瞬間、レックスは締めをほどいた。

回転したまま放した場合、どうなるか？
簡単なこと。

ロイの身体が投げ捨てられる。

「ぶへっ……う、レックス、このヤロ……」

「み、見苦しい姿をお見せしてしまいすいません!!」

「無視か、無視なのか!」

そそくさと地に倒れるロイを後ろにして、カカトを思いつきりロイにぶつける。

「グッ、は……む、無念」

そんなやりとりを笑みを浮かべて見る彼女は

「仲がよろしいですね」

相変わらず優しい声で、レックスに話しかけてくる。
堪らずふらっとしてしまう。

「あ、あの、俺をこ、ここ!まで」

口が回らない。

こんな動揺している自分がいるとは予想だになかった。
彼女は言いたいことを察してくれたのか

「ええ、急に倒れてしまってから村まで来るとその子が慌ててこの部屋まで」

ロイを指差してまた微笑みを見せた。

「彼、貴方のことを大切に思っていますよ。 あんなに人のために必死になるなんて、中々出来ないことです」

話ができるのは嬉しいが、ロイのことばかり言われて内心落ち込むレックス。

彼女は気にせず続ける。

「仲良くするんですよ？」

姉のように優しく語りかける彼女はやはり美しく、見とれてしまう。

「は、はい！」

「はい、よろしい」

つい、彼女の微笑みに酔ってしまいそうになる。
そんな余韻に浸っていると、静かに彼女の表情が真剣なものへと変わっていった。

「今日の事は忘れなさい」

突然、今までよりも強い口調で告げられた。
忘れる、と。

言わずもわかる、あの怪物のことだというのは

「…アレは、一体」

「知らなくて良いことはあります。そう、知らなくていい…」

それは、初めて見る、女性の悲哀に満ちた儂い表情。
胸がちくりと痛んだ。

彼女の表情と、彼女とは別世界にいることがわかったようで、
鬱になる。酷く

「…はい」

頷くしかないので、頷くと少しだけ悲しそうに笑って、静かに部屋を出て行った。

残されたレックスはただぼんやりと木目の違う天井を見て、盛大な溜め息をついた。

村長の家は村の奥にひっそりと建っている。

簡素であるが、造りはしっかりしていて、一人で住む村長にはその

家は大きいといつも嘆いていた。

コンコン、と扉を叩く音がすると

村長ジョージアはややあつてからその扉を重たげに開けた。

前にいるのは美しさを体現した女性が、真面目な顔でジョージアを見つめている。

どうぞ、と居間へと促すと彼女は頷いて後に続く。

お茶を出そうとポットに手をかけると

「お気遣いなく」

と一蹴されてしまったので、手持ちぶさたなまま椅子へと腰かけた。

パチパチと暖炉から木が燃えて弾ける音が煩わしく聞こえる。

彼女は待っているのだ。

ジョージアから話を始めるのを

少しでもうつつ向いて躊躇ってしまうが、沈黙にも堪えられず

やがて重い口を開いた

「この村に御呼びしたのは他でもありません。“天魔病”について
のことです」

“天魔病”

その単語を聞いた瞬間、彼女の眉が僅かに下がった。
気づくことなく、ジョージアは続ける。

「ダリウスという資本家がこの村付近に隠れているという噂は聞き及んでいました。ですが、その件とは別に依頼したのです」

「ダリウス以外にも“天魔病”患者が？」

言うまでもなく、ただ頷いた。

「この村の者ですね？」

再度、頷くジョージア。

「村長殿、心中はお察しいたします。ですが、心に留めることは誰の為にもなりません」

長い髭を触り、苦しげな顔でうつ向いては彼女を見て、またうつ向く。

ついには観念したのか

「宿屋の主人、ボックスです」

「宿屋の……症状は？」

「第………二段階、です」

そこで、彼女の微かな溜め息がした。

互いに辛い表情を崩さず、黙り込んでしまふ。

「私のせいです。私が気にも止めずにいたから……」

嗚咽を上げ、ジョージアはしがれた声で顔を押さえていた。

この歳になって泣けるとは、この村は良い証だ。

そんな場違いな考えを振りきって

「気に病んではいけません。第一から第二への移行はすぐなのですから」

「……わかって、わかっております、それでも悔やみきれないので
す」

本当に良い人。

どうにかしてやりたかったが、彼女には第二段階に移行されては成す術がない。

第二段階は処分するしかないのが現状。

「彼は何処に？」

質問に首を振り

「分かりません。夜に現れるのですが、未だ誰も襲ったりしないのです」

「まだ自我が残っているのでしょうか……辛いことです」

「騎士様、どうか、どうか彼をボックスを神の名の元へお救い下さい」

すがりつくように、伏して頭を地に付けた。

悲痛な思いがよく伝わってくる。

叶うのなら救ってやりたいが…

「村長殿、私は修道協会ではないので無神論者です」

そう、神など信じてどうなる。救いなどないのだ。彼ら第二段階の者たちには。
だが、せめて

「私が出るのは苦しみから解放させることのみです」

そう告げると、踵を返してジョージアの家から出た。
その間際

「ありがとうございます」

と彼は力を絞り出して感謝を述べた。

ぎりっ、と歯を噛み締めるのが自分自身なのに驚いていた。

別離 たびだち

静寂に包まれた小さな村リナールは、日中とは打って変わって眠りに落ちていた。

宿屋も例外ではなく

数日前から姿をくらませた主人バークスがいないまま、夜を明かしていく。

レックスもロイもそれ以前からバークスの態度がおかしいのは知っていたし、何度も皆が心配していたのもあった。

現にいなくなる前に何日か寝込んでいた。

それより前になると、妙に宿屋の経営にひっきりなしになっていた。

ついには村長に相談してみたが、大丈夫の一点張りの結末。

ロイには母親はいない。

ロイを産んだ時に亡くなっちゃったのだ。

さしてロイは気にしていないが、それでも時折淋しい顔をすることもある。

男手一つで育てられたロイは父親思いのいい奴だとレックスは常々思う。

だからこそ、バークスを探し出してロイの元へ連れて来てやろう

そんな時、バークスが夜になって村外れをさまよっていたのが目撃された。

以来レックスは夜になると決まって外を歩き回っては、明け方になるまで戻らなくなる。

ロイは気付かない振りをしていたが、内心は心配でいた。

レックスは今宵もバークスを探しに村外れまで足を伸ばす。

足音一つ一つさえ良く聞こえるくらい、リナールの夜は閑静としていた。

怖いのは苦手なレックスにとって、かなりキツイものであったが、バークスを探し出す意思が勝ってしまい恐怖心を抑えつけてしまう。

バークスには本当にお世話になった。

身寄りのないレックスを快く引き取ってくれ、十二分に養ってくれたのだから。

感謝してもしきれない。

「うしっ、早く見つけてやらないとな!」

気合いを入れて、夜の暗黒の景色に目を馴らす。

次第に慣れ始めれば、周りがある程度見え物体ならだいたいがわかった。

昨日、一昨日と探していない場所へと移動する。

「バークスさん！いるなら返事してください！」

既視感。

今日もそんなことがあった。

彼女を探しに行ったこと。

今思い出すとあのおぞましい異形の怪物は何だったのか…
見たこともない生き物。

青い血。

思い出すだけで寒気が襲ってくる。

異形の怪物だけではない。彼女、騎士としての氷点下まで冷たい彼女。
女。

話していてまるで別人。

騎士とはああいうものだ、とひとくくりしてしまえばそれまでだが。

気になることは増えるばかり

これが外での日常茶飯事なのかもしれない

そう考えると、若干リナールにいた方がいいという自分に気付く。

「っ…はあ…わからん」

何がしたいのだろう、俺は。

ただ退屈凌ぎ程度なのか。それだけで村を出ていいのか。
わからない

思考するのは止めよう

今は

「バークスさんのことだ」

集中を視界に定める

今夜こそと

辺りを見回す。

不意に、また寒気がした

「…だ、誰だ！」

訳もなくいるかもわからないモノに声を上げてしまった。
この感じ、何故か知っているような気がする。

否、知っているのではない

今日感じた感覚が再び訪れてきた

あの怪物を見た感覚と

同じだ。

「くっ…」

呼吸が止まっていることに気付いて、なお吸うことができない。

危ない、危険信号が鳴る。

心臓がバクバクと高鳴り、身体が退いていく。

だが目が離せない

好奇心が、アレを見てみたいとその場に留めてしまうのだ。

ドクン、大きい鼓動。

目を凝らす。

ドクン、さらに大きく

アレを視界に捉える

ドクン、張り裂けてしまうまでに

見えた。

「オオオオオオ！！」

耳を押さえる。

鼓膜が破れそうなまでの咆吼。

その獣は紛れない、異形の怪物だ。

好奇心が一気に恐怖心へと変容して縛り付けていた足を解放した。

急いでその場を離れる。

駆ける、振り向くことなく

アレは自分に気付いているだろうか、見えているだろうか。

「はっ、はっ…はっ」

恐い。恐い。恐い。

振り向くことができない。

足音は聞こえない。

よかった、ホッと息を吐いた瞬間

何か鋭いモノと強い衝撃がレックスの身体を叩きつけていた。

「っああああああ！」

痛みがじんじんと広がり、動けなくなる。

生温いモノがベツトリと身体にまとわりつく。

鉄の匂いが吐き気を襲わせる。

気持ち悪くなつて、流れる先を触ると

「うあ、ああああ！！」

とてつもない激痛が全身を走る。

耐えられない痛みに叫ぶほかない。

頭が命令してくる。

逃げろ、逃げろ、逃げろ。

「う、あ、あ」

這いずるようにして逃れようとした。
しかし、頭が何かに強く踏まれる。

「ぐっ、が…あああ」

信じられないまでの力。

頭が地面にのめり込み、踏まれる頭蓋が悲鳴を上げていく。
その悲鳴と一緒に痛みと恐怖がついてくる。

もはや泣くしかなかった。

涙が溢れて、気持ち悪くなり、身体が浮いたようになる。

「ああ、あ、うう」

「ガルルルル…ガルル」

みしみしと頭が割れんばかりにシなっていく。
何も考えられない。

真っ白な頭。

ぐちゃぐちゃな顔。

こんな惨めに死ぬなんて最悪だったが、どうしようもない

ただ、死ぬと分かった時にどうしてか冷静になっていた自分がいた。

そして

「わる、いなロイ。俺、死ぬわ」

言った瞬間に涙がとめどなく流れて悔しくなってしまう。
同時に頭が軽くなっていた。

それは死ぬからだと思ったが、まだ自分は死んでいない。

なら何故か。

反射して頭を引っ込めた。

地を転がる身体。

重みから解放され、動けるようになった。

相変わらず痛みと恐怖心は残っているが、少しだけ頭が回る。

（何が起きた？）

踏まれてたはずの重みがなくなった。

（力を抜いた、どうして）

躊躇いなどあるのか。

アレはそんな感情など持っているのか。

いや、待て。

そもそもアレは何だ

今日見たはずだ、化物になる以前、それは確かに人であった。突然
変異したのだ。

（アレは人だった？）

何かが繋がった。

だが、答えを導いてくれない。
違う。

「否定したい、んだ」

答えは出ている。

認めたくない、認めるわけにはいかない。

化物を見た。

それは元の人 の 原形 など 微塵 も 残 っ て は い な い が
身につけた物は変わることにはなかった。

「あ、ああ…ば、バークスさん」

それは、余りにも残酷で絶望的な真実。
化物の耳に付いたピアス

あれはロイがバークスさんにプレゼントした物。

「まさか、まさか…っう」

今まで感じることもなかった激痛が再び来た。
傷は深い

これなら失血死してしまう。
それ以前にこの場をどうするか

バークスを見れば、苦しみもがいている。

「バークスさん…まだ意識が」

「残念ながら手遅れです」

刹那の出来事。

バークスの頭上からかかった声はそのまま急降下し、手に持っていた剣を

「ガ、アア……………」

脳天から串刺しにした。

叫びは一瞬。

バークスは直ぐに息絶えていた。

速すぎた、行動もそうだが、何より躊躇いなど欠片もない。

これが騎士なのか、と戦慄してしまう。

女性らしい細い腕からは考えられない、凄まじい力で完全に脳天から深々と突き刺さった剣。

息絶えたことがわかれば、あっさりと突き刺した剣を引き抜き、瞬

く間に消し去ってしまう。

一連の動きに無駄はない
流れる動作はただ一瞬で獣を沈めた。
そして、獣を無表情で一瞥し、レックスに振り返ると

「お怪我は？」

冷たき表情はうつてかわって気遣う眼差しと、優しげな声となっている。

答えることもできず、呆然としていると

腕から血が流れるということを発見するやいなや

「腕を、治療します」

なすがままに腕を掴まれ、残った片方の手で

「キュア【治癒】」

光が溢れる。

その瞬間に腕にあった鋭い痛みが段々と引いていく。
暖かさから心地よくなり、思わずまどろみを覚えてしまう。

だがそれもつかの間。

光が消え、彼女の手が離れるとレックスは名残惜しいように彼女の手を見つめ、消えた傷を触った。

「！傷がない！」

確かに痛々しい傷が腕にあったはず。なのに、そこにあるはずのものがないのだ。

驚きの連続で、頭の中がぐるぐるんと回る。

平然とした顔で彼女は

「魔術をご存知ではありませんか、無理もない。ここは無縁の地ですから」

魔術。

言葉だけなら聞き覚えがあった。

「魔術って、火とか水とかを出せる、あの魔術」

ゆっくりと頷くと
レックスは

「すげえ！騎士様は何でも出来るんですね！」

尊敬の眼差しを注ぐ。

憧れていた騎士は、想像以上の人で

レックスは既に彼女を崇拜に似たもので見ていた。

「しかし、一人で夜を出歩くのは感心できませんね。戻りましょう」

「あつ、はい、戻ります戻ります！」

後を追うように、彼女の元へ駆け寄った時

改めてレックスは現実という巨大な石を叩き付けられた。

視線の先

見るも無惨な獣の死体。

獣、いや、アレは

「…バークス、さん」

思い出す。

バークスが身に付けた物が獣に付いていたこと。

そして、頭から剣を刺されたことを。

「あ、ああ、あ」

頭が痛い。

考えが及ばない。

確信が現実を理解させ、心が精一杯否定する。

否定する、アレはバークスなはずがない否定する、バークスが死んだわけがない。

それでも、やはり現実には酷であり

「彼は貴方のご友人の父親です。お辛いでしょうが、こつする他ありませんでした」

どうかお許しを

頭を下げた騎士を前にして、レックスは悲痛な顔で

「嘘、ですよ」

「……………いいえ」

ははは…

乾いた声が力なくレックスの口からもれる。
痛みの消えた腕をさすり、幻痛を感じる。

死体と化したバークス。
そう、アレはバークス。

ロイの父親のバークス。

「嘘、嘘だ、嘘だ！そんなわけない、そんなわけ……」

必死になって否定する
無駄だとわかってても否定する。

「だって、この前まで、あんな…げん、きだったのに」

「……………」

頭を下げたまま、無言で目を閉じる騎士。
それを見たレックスは思わず

「なんで、なんで殺した！殺さなくたって…」

「あの状態になった者は…救うことは出来ません」

淡々と、告げられた真実。

しかしレックスにはそんなこと関係なかった。

「だからって、殺すことなかったじゃないか！！」

「そうしなければ被害が出るのは目に見えたこと」

わかっている。

彼女が来なければ死んでいたかもしれない。

「だけど、だけど」

涙がいつぱいになる。

胸が苦しくなる。

頭が痛い、辛い、辛すぎる事実。

突然すぎた、平和な日常に舞い込んできた非日常の出来事。
人の死、異形の化物、騎士、魔術…

レックスには到底会えることなかったことばかり。

それが今、引き金となりレックスの感情を駆り立てた。

「う、う、うわあああああああああああ！」

叫ぶ彼をよそにただ彼女は地を見つめていた。

ガチャリ、ギイ

年期の入った木製のドアがきしんだ音を上げて、おずおずと開いた。弱々しい足取りで椅子に座ると、盛大な溜め息を吐く。そのせいか、彼の顔には青ざめて生気が失せたように今にも消えてしまいそうだった。

ジョージアの元へ騎士が戻って来たのは、あれから小一時間程。

その背にレックスを抱えていたことに驚いたものの、一抹の不安が胸をよぎった。

騎士は暗い表情で

「この子を」

下ろされたレックスはひどく顔を腫らして、うなされるようにしていた。

ジョージアは急いでレックスを自室へ運び、寝かせると、重い足取りで部屋を出て居間の椅子に腰掛け現在に至る。

なので、居間にジョージア一人だけというわけではなかった。対面する騎士は気品漂う雰囲気で、恭しくも腰掛けている。これだけで一枚の絵になる、とジョージアは感心してしまう。

「お疲れのようですね、では私はこれで失礼いたします」

「待って下され！」

立ち去ろうとする騎士を珍しく声を強くして止めてしまっていた。ぴたり、と背を向けた騎士の様子を窺うことはできないが、気にする余裕はジョージアにはない。

手で椅子に座るよう促しても、騎士は振り向くこともなく

「バークスは始末いたしました。私の任務はこれまでです」

「……………そう、ですか」

力が抜ける。

生きた心地がしないようで、無気力にテーブルを見つめる。
後悔も悲哀も予想とは裏腹にやってこなかった。

自らの力不足に、何もかも失った気がした。

「…ありがとうございます、騎士様」

感情のない、感謝の言葉。それでも言わずにはいられなかった。

「心中お察しします。お辛いでしょうが、仕方のないことなのです」

「ええ、わかっております」

口から出ただけの言葉。

ジョージアに聞こえないくらいの溜め息をつく。

「それでは私はこれにて…報酬の方は後日、遣いが来ますので」

そう言つと

彼女はややあつて踵を返し、ふと立ち止まる。

「一つ、お聞きしたいことがあります」

ジョージアは何も言わず、こくりと頷いた。

「この村に二人、互いに黒髪の男女が来ませんでしたか？」

「……………いえ、わかりかねます……………ただ、バークスでしたら記憶していたかもしれません」

バークス、の発音に声がくぐもっているのがわかる。

そうですか、と答える彼女は今度こそ頭を下げその場を後にした。

残されたジョージア。

虚空を見て、じわじわと涙が溢れて

ついには嗚咽をもこぼしてしまっていた。

「う、おお……………おおおお」

壁越しに聞こえるしがれた泣き声は、彼女にどんな思いを抱かせたのか…

彼女は静かに去る

ぎりり、と歯ぎしりが鳴った気がした。

目が覚めた。

レックスは直ぐにこの部屋が村長の家だというのがわかったが、何故いるのか

理解するのに、数分かった。

「そう、だ。俺はバークスさんの……う、ぷ」

喉元に熱いものが流れてきそうなのを、口で押さえ何とかこらえる。

涙が出て、喉に残る感覚が気持ち悪さを促すが、今はそんなことで参っているわけにはいかない。

ふらふらと部屋を出て、ジョージアの家から出ようと歩いていると

何か、人の声らしきものが耳に入った。

それは遠くからではわからないが、どんどん近くなる毎に誰かが泣いてるとわかってしまう。

「村長……」

「う、う……レックス、か…目が、覚めたのか」

「バークスさん、のことか？」

「お前は現場にいたようだな。さぞ辛かろう、バークスにはよくし
てもらっただろうからな」

フラッシュバックする映像。

バークスの変化、そして、死。

頭に映るものを投げ捨てて、ジョージアを凝視する。

「騎士様は？」

「ローゼスにお戻りになられたはず。……………いや、もしかした
ら」

最後に彼女が言った言葉

ジョージアが返したのはバークスが知っていたこと。

バークスが知っているということは

「レックス、ロイは人の顔を覚えるのが得意だったな？」

突然の質問。

一瞬、意味がわからなかったがジョージアのその強い視線に真剣で
あると知り

「あ、ああ、いつも自慢気に言ってる“俺はほとんどの宿泊客を覚えてる”って」

「やはり…騎士様はロイとバークスの関係を？」

「知っているよ」

「…！レックス、今すぐに宿へ向かえ。騎士様はロイに会いに行つた。二人を会わせるのはまずい！」

声を荒げるジョージア。

びっくりしてレックスは一歩たじろぐが

やがて言葉の意味だけが頭の中で結びつくと

「なっ、俺、行ってくる！」

全速力でドアを開け、家を出てひたすらに駆けていく。

彼女は恐らくロイに真実を話してしまうだろう。

そうすれば、ロイはどうなる？

バークスを殺したのは彼女。

果たして受け入れられるか、いや無理に決まっている。
現にロイはバークスのあの異形を見てはいない。

ただ、殺人を犯したにしか思えないはずだ。

「クソっ！何だって騎士様はロイの所に」

ジョージアの質問。

宿泊客の顔を覚えている

それが何だというのだ

普通に考えろ、そんなことを聞くといいことは

「人を探しているのか！」

間違いない。

バークスならばほとんどの来客を知っていたし、ロイも同じだ。

急がないと

レックスはこれ以上ないほどに足に力が入っていた。
ジョージアの家から宿までは距離はそこまでない。

だが、少しでも少しでも早く着かないと

「待ってる！」

「ロイ！いるか！」

レックスが宿のドアを力強く開けた時だった。

「人殺し！お、俺の、父ちゃんを返せ！」

激情の怨み声が、宿に広がっていた。
憎悪に満ちた表情。

レックスが駆け付けた時に見たロイの顔。

酷く他人のように感じてしまっていた。

「……ロイ」

認めたくはないが、彼はロイだった。

レックスに振り向き、憎しみの顔は変わることがない。

憎しみの矛先がレックスに変わったようにしか思えなかった。

「なんだ！邪魔するな！」

「違う、違うんだ、ロイ！」

説明しなければならない

あのことを

彼女がいなければ間違いなく自分は死んでいたことを
口にしようとしたが

「貴方には申し訳ないことをしました」

彼女が、ロイの怨みを自らに矛先を向けさせた言葉だった。
狙ったのかどうかかわからないが、ロイはまた彼女に見向き

「は、何だよ、それ……そんなことで、そんなことで許されるわけないだろぉ！……あんたは父ちゃんを殺した！許さない、許さねえよ！！」

「ロイ！落ち着けよ！」

レックスがロイを取り押さえようとした

が

「うるさい、触るな！邪魔だ！」

完全な拒絶が、
レックスを大きな衝撃で叩きつけていた。

「ろ、イ……」

「何で、何で、父ちゃんが……殺されなきゃいけないんだよ……返せ、返せよ……… たった一人の家族なんだよ」

「……」

またしても頭を殴られた衝撃が走った。

たった一人の家族。

その言葉がレックスの心に虚しくもひびを入れた。

家族だと、思っていた。

そう信じていたし、当たり前だと思っていたこと。

全てが今、たった一言で否定された。

レックスを孤独にさせる。

もはやレックスはロイを見ることが、できなかった。

「なあ、騎士様は人を守るためじゃないのかよ……人を助けるためじゃないのかよ!!」

とどまることを知らない。歯止めがきかないロイの批判の数々。

彼女は動かない。

眉一つ動かさず、ただただロイの言葉を受けていく。

「何か言えよ、何黙り込んでんだよお! あんた、最悪だ……騎士なんかじゃない。死んじまえ! 死んじまえよお!」

「……………」

「父ちゃん、父ちゃん……うつ、うつ……」

泣き崩れていく。

力なく、膝が折れてその場で床に額を付けて

ただ涙を流し、怨みを言い、呪っている。

レックスが入る余地などなかった。

いたたまれなくなる。思わず宿を出てしまった。
逃げるように……

見上げた空は未だ暗く、肌寒い風がレックスの心までもをかじかんでいく。

溜め息さえ出ずに、ぽつぽつとあてもなく歩く。

ロイの場所に帰るつもりはない。

バークスが死んだ今、レックスを養う経済力はなくなってしまった。
これでは迷惑もかかるし、何より先の否定が自分の中で渦巻いている。

所詮、血の繋がらない者同士は他人に過ぎない。

つくづく痛い。

「一人、なんだ」

世界はずいぶんと酷いもんだと失笑してしまう。

何もやる気がない。

虚に浮かぶように、自分自身を喪失した感じがレックスの心を蝕む。

「居場所はない」

小さい頃に、自身が何なのかわからない時があった。
捨て子、とさげすまれることがよくあった。

その頃は身寄りもなく、一人虚しく生きていか。

まるで小さい頃に戻ったようだ。

「はは……辛い、なあ」

空を見上げることができなくなる。
視界が霞み、地面が歪んで見える。

「くそ、くそ……」

世界はなんて理不尽なんだ。思いや願いなどありやしない。
無情すぎる。

「ここにいましたか」

「っ……！」

急にかけられた声に驚き、慌てて顔を腕でふく。

「探しましたよ、レックス」

名を呼ばれた。

きっと本来なら嬉しいはずが、喜べなかった。

「な、何ですか？」

「申し訳ありません。貴方にまで悪いことをしてしまいました」

ああ、そんなことが。

今では気にすることではない。

「いいんです。俺はあいつの前にはもういられないんで…バークスさんの死を見てから、ロイとは……」

「この村を出ていくつもりですか？」

「そう、なるかなあ…行くあてもないけど、ここにはいられないや」

歩く先は村の出口。

気付いたらレックスは無意識に出ていこうとしていた。

「リナールはいい村だ。でも俺の居場所はここにはないとずっと思っていた」

「……………」

彼女は何も言わず、レックスの話を聞いてくれる。

「せっかくだし、外に出てみようかな？」

「でしたら、ローゼスに来られませんか？」

「えっ？」

耳を疑う。

ローゼス、あの騎士団がいる国。

行ってみたい気持はあったが、機会がなかった。

「何をするわけではありませんが、行ってみるのも良いことです。
私が口利きすれば、居住することも可能ですし」

「……………ほ、本当にいいんですか？」

「ええ、貴方がよければ、ですが」

微笑みを見せる彼女。

願いが叶った、そんな気がする。

だから、躊躇わずにレックスは

「行きます！行かせて下さい！」

返事を聞かぬやいなや、彼女は手を差し出した。

「ヴァレルヘリカ、ヴァレルヘリカ・スカイコートです。宜しくお願ひします」

差し出された手

レックスは恐る恐る握り、彼女の、ヴァレルヘリカの柔らかい手に喜びを感じ

二人は歩いて、リナールを出た。

王都 あこがれ

暗闇に染まった空間

一筋の光さえ遮断したこの場に一切のモノが不可視であった。

ここは本来であれば月光に照らされるはず。

しかし、今宵は新月

白銀たる光はその手を差し伸べてはくれない。

ふと、闇の中に何かが動く気配がした。

コツコツと一定の間隔で響く音は何処かへ向かっていく。

やがてその音がピタリと止むとそこで始めて音の正体が足音と分かった。

「こんな夜更けに如何されましたか？」

男性の声だ。低い声にも関わらず、力強さが感じられる。

誰かに話しかけていた。

一体誰に。

答えは直ぐに解かれる。

「少しばかり昔を思い出して、な」

返って来たのは、女性のもものではあったが、くぐもった声。何重

にもなつて発せられる。

まず声としてはあり得ないものだった。
だが、男性は一向に気にかける様子もなく

「またあの事件を？」

「ああ、何時になつても消えやしない。この痛みと共にな」

がしやり、と金属音が鳴つたのは女性の鎧。

重量感のある鉄の衣は見えはしないが、恐らく豪華で厳かであろう。

吐いた溜め息がこの静かな場所ではよく耳に入る。

男性は僅かに身じろぎ

「貴方様にはお辛い出来事でした……」

「過ぎた事よ。お前が気に病む必要などないのだ」

男性は次に口に出そうとしたが、ためらい、そこで止めた。
沈黙する空間。

男性はどうしてか居たたまれなくなり、見えないにも関わらず敬礼をし、踵を返して立ち去っていった。

残された彼女は未だ沈黙し、ただ虚空を見すいている。

「あれから、早いものだ」

呟いた言葉は誰に聞こえるわけでもなく、闇に溶け込むように消えていった。

「だが、ようやく…ようやくだ」

暗闇の中でその表情を窺うことはできないが、その声はただ含みを得たもの。

彼女の目的であり、願いに願ったことが目の先に見えてきたのだ。

そして彼女は立ち上がるとゆったりとした足つきで、その闇に包まれた空間を抜け出していった。

王都パリバート

別名奇跡の都市。

かつては廃墟と化した地であったものの、現王であるイヴ・ローゼスによって再建、幾年もかけて人を呼び、さらに幾年もかけて発展に次ぐ発展。

怒涛の勢いと言わんばかりの繁栄を築き上げた。

小国ではあるが、国と為し他三国と同盟。

更に巨大な組織がバックにつくことで余りにも超大な力を持つことになる。

人々はこの豊かな暮らしを享受し、同時にローゼス王国直下の騎士団によって堅固な守りを誇っていた。

故に多くの者が憧れ、かの地に移り住むことを積極的に望む。

首都であるが為に商人が活発に往来し商業が盛んになり、貿易も離れた同盟国との多種多様な物々を交易する。

何より効率化を産んだシステムが瞬間固定転送陣。

エルフの王女によって発案、設置された半永久魔法。陣を展開し、固定された陣に転送されるもの。一つの陣から転送される地は一つだけであり、パリバートには実に50を超える転送陣がある。

そう、パリバートとはあらゆる面において発展した都市なのだ。

昼上がりの活気に満ちた喧騒の中、憧れの地に足を踏み入れた青年がいる。

辺りをせわしく見回しては喜びを露にしていた。

彼の前には優美という形容が似合う女性。薄めの金の髪が日に照ら

されよく映えていた。

女性は青年を待つように一歩一歩をゆつくりと進んでいる。おかげで青年は取り残されるわけでも、辺りを見回す余裕もある。

「へえ、ふんふん、ほおほお……むむ、おおお……ん？うお！」

あっちこっちに足を運び、初めて見る物には感嘆な反応を示す。まるで物心のついた子供のよう。

しかし女性はちらりと一々青年の行動を見ては足を緩め、微笑みを浮かべている。

「レックス、如何ですか？パリバートは」

余りにも集中していたのだろう。

背後に立たれ優しく声をかけられたことに、

「ぬああああ！！？」

勢い余って前のめりになる。

女性は少しだけ呆氣にとられ、きょとんと目を丸くしていたが、直ぐに手を差しのべてくる。

「あ、す、すいません！すいません！」

「お気になさらず、さあ、そんな所で座っているのは周囲の方々の迷惑になります」

気付けば周りにいる人々が怪訝な表情でレックスと呼ばれた青年を見ていた。

気まずい雰囲気になったので、慌てて立ち上がりうとして

「うわっ、とと」

また違う場所に転んでしまう。

これには周りの人々も溜め息をつき、興味がなくなったように去っていく。

「まったく、仕方ありませんね」

見かねた女性はレックスの肩を自らに掛けると、するりと持ち上げる。

「えっ」

レックスは驚愕した。

何故なら現状が信じられないからだ。

自らの肩を担がれたということは肘から下が行き場を探し、不自然にも彼女の胸に触れてしまった。

そう、驚愕は驚愕によって制される。

「~~~~~!」

声にならない叫びがこでしたが、即座にレックスは彼女の方を見た。

「…？立てますか？」

まるで何事もないかのよう。

そもそも彼女はボディタッチなど気にするような女の子、的な気質ではない。

「何するのよ、変態！」

という言葉など使うはずもなく、レックスは安心したような残念だったような複雑な心境だった。

「……………」

思わずガッツポーズ。
この手を洗うことはもうない

「水と触れ合い、石鹸と踊ることは……もうないだろう」

フツ、と柄にもなくニヒルに笑ってみた。

「…本当に如何されました？」

表情退散、思考再開。

目標を定めて視線を向ける。

彼女は煩惱に満ちた考えを知るはずもなく、心配そうにこちらを見つめている。

「いえ、何でもありません。騎士様」

「はあ？ならいいのですが。それより先程の質問を」

先程の質問。

レックスにはそんなことあったか、と自問してみるが見当がない。
と言っても恐らくは聞いていなかったただけなので、馬鹿正直に聞いていませんでした、と言うのも恥ずかしいので

「むむむ……そう、ですねえ。ううん、と」

とりあえず考える振りだけやってみることにした。

「難しく考えず、思ったこと、感じたことでよいのですよ」

汗が一つ

「は、ははは！え、いや、えと…そのですね」

汗が二つ

「はい」

汗が滝へと進化。

もはや耐えがたい重圧。

苦苦しい笑いで言葉を探す。しかし、質問がわからない。

「とても（胸の感触が）いいです」

言ってしまった。

馬鹿正直なくらい、馬鹿過ぎる感想を。

そして、ちらり、と彼女を窺ってみると

両手を合わせて嬉しそうに

「そうですか。それは何よりです」

と宣って下さった。

その瞬間に重圧から解放されたレックス

「はい！」

と結果オーライだと相槌を打ってその場を過ぎた。

ローゼス王国直属騎士団。ローゼスに住む者にとってその存在は尊く、憧れである。

騎士は民の剣となり民の盾となり、これを以って騎士道となす。

子供は夢を抱き、皆将来は騎士になろうとする。

故に志願者は絶えることはなく、また、来る者拒まずの騎士団は莫大な人数を誇っていた。

しかし、入団したからといって誰しもが騎士になれるわけではない。見習いとなって、雑用と使いっぱしりから始まり、更には学問を取り、実習を受け技量を上げる。

実力が認められれば騎士の補佐として、更には騎士抜きでチームを編成して任務を与えられることになる。ここで見習いは兵士として扱われる。

兵士間にはCランク、Dランク、Eランクとあり月に一度の検定試験で決められ、Cランクの者だけが騎士との交流試合を果たして実力に見合えば晴れて騎士となれるのだ。

「とは言うものの、実際には騎士の数は一定数で、交流試合での相手騎士に勝利することで、相手の騎士の称号を奪うようなものです」

騎士団本部前まで来て、おおその話をレックスは聞いていた。今現在の騎士の数は21。それぞれ序列があり、1が最も強く、21が最も弱いもしくは新参者であるということ。

「兵士が騎士と交流試合を出来るように、騎士同士もそれは可能で序列を交換するためです」

「へえ、なるほど」

「しかし、これは稀有なことです。互いの実力が分かっているため、

滅多なことでは挑みはしないのですから」

特に一桁の騎士はしばらく変動してはいないらしい。

「物凄く大変なんですね。騎士になるって…」

「……………そう、ですね」

「??？」

レックスは首を傾げる。

彼女にしては珍しく、いや、初めて明らかに表情を暗くさせていたのだから。

やがて自分がどのような表情をしていたのか気づき、取り繕うかのごとく無理に笑顔を作った。

どこかぎこちなかったが、レックスは素知らぬ振りで

「じゃあ、俺ここで待っていますので！用事済ませちゃって下さい！」

乱暴にその場に座り込んで、彼女に対して手を強く振る。

一瞬レックスの対応に驚き何も言わずにいたが、意図が分かったのか、こくりと頷いて

「ええ、申し訳ありませんがしばらくお待ち下さい。直ぐに戻ります」

優雅な足取りで門へ歩み始めて、ああ、それと、と口を加える。

「ありがとうございます」

「…あ」

悟られていた。

どうしようもないくらい気恥ずかしくなってしまう。

同時に先程の言葉がプレイバック&リピート。

「ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。………」

衝撃が繰り返しレックスを襲う。

何重にもなって彼を打ち付ける。

嬉しさが溢れるばかりに満ちいく。あんな美人に言われて落ちない男などいない。

「これが、恋というものか!!」

心が爆動する。

顔が熱くてたまらない。

「いやっほオオオオオ!!」

再度ガッツポーズ。

「こ、この喜びを誰かに伝えたくてたまらなくなってしまった」

その時、隣を誰かが過ぎ去っていく。

余りにも良いタイミングに彼レックスは神様に感謝と祈りを0・0
01で終わらせ急ぎ足で後を追う。

「ちょっと待ってくれ!」

「ん?ん、ん、俺のこと?」

辺りを見渡しても誰もいないので、必然と呼び止められた人物が振り返って応じた。

おかげで簡単に追いつくことができ、その人物が男であることがわかる。

「ああ、聞いて欲しいことがあるんだ」

何故か相手に話すと思った途端に緊張して、心なしか真剣な表情になつてしまう。

それを見た男はごくり、と息を飲み込み、こちらにも真剣な表情でレックスを見据えた。

「どうした？何かあったのか？」

「それが、上手く言えないんだが、いいか？」

「ああ、言ってみろ」

これだけでこの男が気の良い性質だと判断できる。
普通見ず知らずの他人が呼び止めたら怪しむのが妥当だというのに。

「俺は、こひ、恋をしたみたいだ」

「……………」

「なあ、どうしたらいいんだ！頼む、この哀れな子羊にお慈悲を！」

瞬間。

頭に鈍い衝撃が走ると同時に声にならない激痛がきた。

痛む頭をさすると既にこぶらしきものができており、そこで彼に殴られたとわかる。

「お前、馬鹿か」

「なっ、な、な！なんだとっ！」

「何かと思えば、そんな下らないこと…実に不愉快だ！時間の無駄だった」

そそくさと早足で立ち去ろうと踵を返して一歩踏み出した時にレックスは伸ばした手で彼の肩を掴む。

ことができなかった。

「いで、いででで！」

「お前、礼儀の無いヤツだな」

腕を軽く捻られ、後ろに回り込んでの関節技。

動こうにも節がぎしぎしとひしめいて鈍痛が走る。

「っ、てて、はなせ！離せ！」

「……………ふん」

「つつう、なにすんだよ！！」

「それはこちらの台詞と言いたいところだ」

「いてえじゃんかよ」

「……………」

まだ関節が痛い。

涙も少しだけこぼれて、恨みがましく見つめる。

対して彼は腕を組み合わせて呆れた様子。

ややあつて、ふう、と溜め息をついて口を開いた。

「やれやれ、疲れるもんだ」

その言葉がレッスの怒りを広げるには十分過ぎた。

先程腕を捻られたのにも関わらず、再度、掴みかかろうとした

が、

「懲りないヤツだ」

あっさりとかわしてついでに足を掛ける。

勢い付いたままのベクトルが斜め下から地面へと向かう。

そのまま転がって3メートル程してから止まった。

「…あいてて」

「ふう、何がしたいんだか」

彼は最早付き合いきれないらしく、早々とレッスンから離れている。
また、レッスンもレッスンで沸き上がる怒りで追い掛けようとしても、腰を強く打ったのか立ち上がることができず

「それじゃあな」

「あつ、待ちやがれ！くつそおお！」

拳を地面に打ち付けた。

駄々をこねるようであったが、それでも彼の歳　外見はレックス
より2つくらい上　と変わらないのに

「……くそっ」

「如何しましたか？」

「ぎゃああああああ！！」

突如、気配もなく背後から声がかかる。
思わず叫んでしまう。

「驚かせてしまいましたね」

「い、いえ、大丈夫です、すいません。用事は終わっただんですか？」

「ええ、お待たせしました。それでは……」

そこで彼女はレックスの身体が埃まみれで、擦り傷から血が出ているのに気付いた。

すつと傷のある箇所を手をかざし、治癒魔法を唱える。

「あ、ありがとうございます」

「はい、それでは参りましょう」

一足先に進む彼女に歩調を合わせて速くもなく遅くもなく、レックスにとって丁度良いペースだった。

きつと彼女の意図的なものなのだろう。何から何まで気遣ってくれる彼女は、どうしてこんなにも優しいのか。

その答えは後に分かることになる。

来会 つどい

深緑にみまわれた中に、陽光によって照らされた木々たちは存分にその恵みを受け取り、呼吸をしている。

きらきらと輝いているのは昨日の雨によるものだろうか、反射してそれは白き炎を灯した樹木のように捉えることができた。

そんな自然の微かな美しさが彼女に安らぎを与えてくれるが、同時にキリキリと軋んだ音が、刻み刻みに耳に入ってくる。

彼女は馬車の中、他より幾分か丁寧な造りの室内の車窓から顔を覗かせて、それらの景色を楽しんでいたが、いちいち耳に障る不自然な軋音がどうしても気になって仕方がなかった。

最初こそは平然と過ごすことができたものの、何時間も揺らされていくうちに疲労と辟易が合わさり辛抱へと変わっていく。

現在では彼女の覗かせている顔、とは言っても高価な布のフードによって鼻から上は隠している。しかしながらその肌は綺麗で、白く、小さな唇には控えめな紅が塗られていて、在る意味神秘性なものであった。

その彼女の口が微妙に下に弧を描いているものだから、可笑しさがある。

恐らく苛立ちであろう。

対面にある席は明らかに彼女よりも位置が低く、装飾の施しの差異

がある。

そこに座り、クスクスと物静かに笑う女性。

こちら小綺麗な顔をしている。それでも女性は対面の淑女とは比較できない、常々女性は思っている。

「何か可笑しくって？」

彼女は不機嫌を露わにした声音だった。
別段、女性はたいして気にした風もなく、ただ静かに首を振ると、
いえお気になさらず、と淡々と述べた。

「ふふふ」

そして、またしても笑いをこぼしてしまう。

「なに、何なのよ、マリア！」

「失礼しました……ただ先程からの表情が……ふふ」

「何、あたしの顔がどうしたっていうの……」

「お、お気に、なさらず」

「その明らかに笑いを堪えているような態度じゃ、気になるに決まっているでしょう!」

「そんなことはありません」

「棒読みなセリフをありがとう、ってわざとらしいのよ!あたしの顔が変って言うならそう言いなさいよ!その上で笑いなさいよ!」

「いえ、変じゃありませんよ。というか、言えば大爆笑してもいいんですか?」

「大爆笑したら突き落とすわよ?」

「ハチャメチャなことをたまうのですね……」

「うるさいわね、もうあんたクビ!」

マリアに向かって彼女は自らの首を親指で大きく横切って見せた。しかし、さほどに反応を表さず、いまだに物静かに笑うばかりだった。

「ふう……これで私はもう何度クビにされたことやら。私、悲しい」

「あんたは相変わらず人を小馬鹿にするのが好きね。この腹黒女」

「よよよ」

「ああ、もう!!」

今の彼女を他国の人が見たら驚きを禁じ得ないだろう。

国外において彼女は凜とした佇まいと、気品に満ちた対応をしているため【睡蓮の金姫】という二つ名を持っているのだから。

何故、あたしが姫なの？

人間の年齢で換算している彼女は自分が姫と呼ばれることにどこかしら抵抗があつた。

しかし、確かに頷ける。

マリアも彼女もエルフという種族。

自然を愛し、調和を促す使者。遙かな時を生きられるエルフはそれこそ人間の寿命でいう80〜90などでは、老いることなく外見20歳ほどの若い容姿を保っている。

姫と呼ばれるのも仕方ないのかもしれない。

「少しだけ過ぎたことをしてしまいましたね。姫様、申し訳ありません」

「あんた、申し訳ないと全然思ってない顔してるからね」

「まあ、姫様つたら、マリアは悪人ではございませんよ」

も、いいです。

盛大な溜め息をすると、どうしてか彼女は微かに笑みを浮かべたのだから。

マリアが軽く片目をつぶって悪戯に笑うと、彼女はさらに口元を緩ませる。

「ありがとう、マリア」

これは気遣いなのだとはハナから気付いていた。

マリアは他人の感情に機敏であるから、フォローや励ましをよくしてくれる。

故にだろう、数ある侍女の中でも殊に彼女がいつまでもマリアを傍に置いておくのは、その性格が彼女に安心と勇気を与えてくれるから。

互いにエルフにしては珍しい気質であるのも、一種のシンパシーとしてというのは無きにしもあらず。

「何のことでしょうか？」

「ん、そうね、何でもないかもね」

「変なことを言うものですね。アルテリツシュ様は」

「ウフフ……ごめんなさい。あたし苛立っていたんでしょうね、きつと」

それはキリキリと音を立てる車輪に対してではなく、これから訪ねる国に対してなのであるう。

国交を問題として会議を開いたかの国の女王。

アルテリツシュはその会議に招集をかけられている。

馬車の中にはマリアと2人つきりではあるが、違う道を通って彼女の国の要人が目的地を同じくして向かっているだろう。

既に議会では結論はでている。後はいかにしてそれらを論じ、事を上手く運ばなくてはならない。

問題は山積みではあるが、重要なのは目の前の事だ。

アルテリツシュは暗い表情で溜め息をついた。

それはほんの僅か、マリアが窓からの景色をちらりと見た瞬間に行ったことだった。

「この森を抜ければパリバートは目と鼻の先ね、マリア」

「ええ、定刻まで割と余裕がありそうですね？いかがです、散策してみるのは？」

「あたしが？くす、不謹慎なことを言うのね。もちろん辞めておくわ、後が怖いからね」

「残念です」

馬車が揺れ、変わらず車輪はきしきしと軋み、悲鳴を上げている。

不快ではあるが、今ではそこまで気にとめることはなかった。既にアルテリッシュの頭を巡るは迫る会議と、かの国に座る王女、そして

「ヴァレルヘリカ」

離別した娘のことだった。

レックスにとって、パリバートに着いてからここ数日間、興奮しない日はなかった。

広大な面積のある都市を歩き回るのは時間を費やしたが、疲れを感じることなくずいずいと歩が進んだ。

目新しい物ばかりで、あっちを見てはこっちを見て、せわしない様子は周囲の怪訝を買っていたがレックスには全く届くことはなかった。

好奇心はさらに強い好奇心を生み出し、瞳を輝かせて一つ一つを視界にとめる。

そして、今日この日にエルフの国の女王がパリバートへ訪れることもレックスにとって既知のこと。

都市の人々は女王を一目見たいと、ざわつき騎士団本部の周囲に集まり始めているので、人垣が尋常ではないほどできていた。

なんせその女王の美貌は大陸一やら、絶世の華やらの情報が流れているわけで、市民の興味は増すばかり。

押し寄せる人波は騎士団に対するデモのようにも思わせた。

「うはあ、これは凄いな！」

いざレックスも人波に飲まれると、もみくちゃにされ、視界がふさがれてしまう。

時折前後から強いプッシングを食らったり、髪を掴まれて押し戻されそうになるが、カ一杯に前へと進んでいく。

ドンッ！

「痛っ、ああ、すいません！」

左からの圧力に耐えきれず、右へと流された時に細身の男性に思いつきり肩を当ててしまった。

しかし、男性は気にした様子もなく、むしろ気付いてないように視線は空を見上げている。

とりあえず形だけでも謝ったレックスはあまり深く考えずにさらに前へと突き進んでいく。

視界が次第に開けていった。

隙間からは厳かな雰囲気醸し出した本部が見える。

「もう、少し」

近くにいた男性の脇へと強引に入り込むと、舌打ちをされたがこの喧騒の中、それが耳に入ることはなかった。

人波を泳ぐように手を掻き、今では前に人はいるものの、肩と肩の間から見える騎士団本部。

ほぼ最前列へと辿り着いたのだ。

そこには一定の間隔で、警備が人垣を押さえつけており、そのラインをはみ出した者は駆け付けた警備たちに取り押さえられてどこかへと連れ去られていく。

本部前には多くの、恐らくは騎士団に所属する者達だろう、彼らが一糸乱れぬ整列を丁字を描くようにしている。

皆、真剣な面持ちで来る女王を待っているのだろう。

中には緊張で震えている者も見受けられる。

丁字の奥には十人程の明らかに風格のある者達が堂々と立っていた。推し量らずともあれが騎士だと判断できる。

あまりに違い過ぎる存在感、そこに整列する者達とは完全にかき離れている存在であると武に詳しくないレックスでさえ一目瞭然なのだ。

顔はよく見えない。

そもそも距離がありすぎるのだから。

視線が騎士に向いている間、丁の縦列の中を進む1人の女性がいた。

ヴァレルヘリカだ。

そこいつの間にかレックスの瞳には陽光に照らされた金糸の髪が揺れ、優雅な足取りで進む彼女が映っていることに気づいた。

人目を惹く容姿はここからでもよくわかる。

同じように周囲の人からも感嘆の声やため息が上がっていた。

乾いた喉を呑み込む音も聞こえる。

「やっぱり綺麗なんだよなあ……」

改めて実感する彼女の人間離れした美しさ。
誰しもが見とれるくらい、やはり彼女は華美だった。

やがてヴァレルヘリカの足は止まり、列の始め、一番手前側に位置づいた。

真っ直ぐ伸ばした背筋に、彼女の整った顔が真剣な眼差しをしたので、まるでつられたかのように市民たちも背筋を伸ばしてしまう。

レックスも例外ではない。

どこからともなくざわめきだす人々。

既にヴァレルヘリカはその発端の方へ視線を投げかけており、僅かながらも表情を固くした。

皆もそれに続くして見ると、一台の馬車が軋んだ音を出しながらゆつくりと彼女の前へと停車する。

ちょうど真向かいにいるレックスからは馬車に隠れて、その中にいるであろう人物を捉えることはできないが、レックスよりも右端や左端にいる者はそれを見ることが叶ったらしく

「「「……お……お……お」「」」

声にならない叫びを上げたのか、どよめきというより、それは口から漏れた吐息のよう。

固まっているのか、彼らは身じろぎさえせず、釘付けになった瞳はまばたくことすら忘れてしまっていた。

整列した兵士たちも同じ状態になっている。

何故か真向かいにいる人々は損をしているような気がして、もどかしくも苛立ちをあらわにして地面を小刻みに踏んでいる。

しかし、決して文句を言うわけではない。

逆にプレゼントを待ちきれない子供のように興奮だけが先走っているのだ。

ゆっくりと御者が手綱を引くと馬車がトロトロとその場を後にしていく。

その間に人々の目は少しずつ奥へと向かっている、つまりは移動しているのだ。

そして馬車が完全に消えたことで、レックスの瞳にその鮮烈な光景が差し込む。彼女はいた。

後ろ姿であったが、ふと思い出したかのようにこちらへと振り返った刹那

「……………」

言葉を失う。

いや、違う

言葉などいらないのだ。

彼女にかける言葉、形容する文字、賞賛を送ることは彼女に対する冒涇でしかないと、頭で理解した。

可憐、綺麗、妖艶、華美、端麗などという表現をすれば彼女を全て否定してしまう。

人は何か感嘆する物事を目の当たりにした瞬間に感じる何かがあり、それを口にした思った途端にそれらは失われると言う。
瞬間、刹那的こそが我々の最も大事な感性である。

故にこの感じを口にするなど、無礼以上の何者でもない。

「……………え？」

レックスは、いや、恐らくは周りの人も拭えない違和感があるのだろつ。

先を歩く2人。

後ろ姿しか見えないが、その2人の髪の色

「金髪……………」

同じ、とは言えない。

ヴァレルヘリカの方が若干暗めの奥みがあった金。

女王のそれは光り輝くまばゆい金。

確かに違つてはいるし、そもそも金髪などはさして珍しくはない。

「でも、何でだ。同じなんだ、同じ髪色」

曖昧な、しかし、確信に近いものが直感的にあった。

だが、その時、観衆の中から爆発したような音と共に悲鳴と叫び声を上げ、地面から勢いよく白煙が立ち込めた時には、レックスの頭からはそれらは片隅へと置かれたのだった。

来会 つどい（後書き）

スイレンはエジプトの国花であり、『ナイルの花嫁』、とりわけ青スイレンは『太陽の花』と呼ばれています。

理由としては朝に花が開き、夜になるその花が閉じるためです。これが睡蓮の由来でもあるんですね。

多くの国の国花として親しまれており、花言葉は『心の純潔、純情、信頼、遠ざかった愛』とあります。

アルテリッシュには意外と合っていたりしますね。

静かな水面に咲く、艶やかで彩美な花。

人々はそこからイメージしたようですが、花言葉は彼女の本質にぴたりだったります。

青は瞳で、太陽は髪の色を示唆していたり（苦笑）

襲撃 さけび

変形。

近くにいた1人の商人は後にそう語った。

突然に身体のおちこちが、ゴキゴキと歪な形をかたどっていくと、有り得ないくらいのおおきさへと膨れ上がっているではないか。

皮膚は変色し、骨格は変わり、人のなりをしていた男性は狼の顔つきとなっている。

喉元を鳴らし、口からは多量の唾液が垂れて地を濡らしていく。

恐怖が走る。

彼の近くにいた人々もその光景におののき、中には腰を抜かす者もいるが、我先にと逃げ出すばかりだった。

青狼は彼らには目もくれず、ただ一点を凝視している。

その先にはあの『睡蓮の金姫』の姿。

激しい音がした。

爆発、いや、それは破砕したような、音。

人の力では地を蹴ろうとそんな音は出せやしない。

青狼はその長い脚をバネに、力強く地を蹴りつけた。

それだけで地面は下に向かう圧力のベクトルに耐えられなく、悲鳴を上げて崩れていった。

跳ぶ。

決して翼のある鳥類のように大地と平行に飛ぶわけではない。

高く、早く、空へと舞い、上空から獲物を捕らえようとするばかり。狙いの先にはやはり女王の姿があり、鋭く尖らせた牙と爪をむき出しなのは明確な殺意があり、矛先へと一直線に向かっている。

この間たったの数秒。

逃げ出そうと思った時には既に青狼はいなくなっている。

呆然と肩を震わせて、為す術なく立ち尽くすだけ。

一般的な市民なら、間違いなくそうなるであろう。

現に動けたのは魔物を見たことのある旅人や、行者、貿易商といった外界を行き来する者達。

しかしながら、その場合、いかにして逃げ切るかや、注意を払うなどの対処法しか知らないため、いち早く後ずさりながらも距離を取っていた。

固唾を見守るとはこういうことなのだろう。

動けない者達は青狼がこれからする行動に目を離せないのだ。

青狼が跳ぶのを誰より早く確認したのは騎士達であった。

瞬間には自らの武器に手を添え、臨戦態勢へと入っている。

長躯の男、見た目は20代後半といったところか、青い髪を流し精悍な顔つきをした騎士達の中央にいる彼こそが騎士を率いる者であるのか、

「散っ！」

命令するより掛け声という合図で、10人の騎士が一斉に駆け出したのだ。

だが、誰一人としてあの青狼に対峙する騎士はいない。それぞれが散り散りとなって人垣へと消えていく。

女王への刺客は執行者が応対するため、不要だと結論づけた。見れば、彼女はどこからか弓を引っ張り出して標的を捕捉している。

引かれた矢が、放たれた時には彼の視線は彼女には向いてはいない。

「警備隊は民間人を誘導しろ！他の【ライカンスロープ】は私達騎士が相手をする。兵士たちは列を乱さず周囲に敵影がないかを確認、守るべきはアルテリツシュ様だということを忘れるな！」

優秀な指揮官がいることは何より重要である。

混乱するこの状況を素早く把握した男は適切な命令を下した。

警備隊は彼の命に我を取り戻し、慌てふためく市民をあらかじめ確保してあった街道へと誘導する。

多くがそれに従い、騒ぎ立てながらも移動していく中、恐怖にまみれた市民の少数があらぬ方向へと走っていく。

警備隊に彼らを追う余裕はなく、見逃すほかはない。

「ちいッ！」

舌打ちをする警備の1人がその場を離れるわけにもいかず、恨めしそくに視線を送った時

「う、うわあああ！！！」

ライカンスロープ3体が待ち構えるように態勢を保っていた。人というのは混乱するさなかにさらにショックを与えると、頭が真っ白になり全身が強張ってしまうもの。

前方にライカンスロープがあり、後方には退路があるにもかかわらず、彼らは逃げ場を失ったかのようにへたり込んでしまう。

もうダメだ、死ぬ。

絶望と悔しさを混じった表情は狼たちを喜ばせば、爪を光らせてゆつたりと近付く。

「うおりやああああ！！！」

突如として先行した狼の1体が脇からのタックルに体を転がした。とはいってもわずか1メートルにも満たず、どちらかというと狼に

全体重を乗せて覆いかぶさっているよう。

「早く、早く立って逃げるんだ！」

目の前の少年はまだ成長過程にあるのだろうか、声変わりも少ししかしておらず、甲高い声がへたり込む市民の頭に深く響いていった。何よりも自分よりも全然若い彼が身を挺してまでしてくれていることに、市民たちは不甲斐なさを感じていた。

「急ぐんだ！いそ、ぐああああ！」

虚をつかれたライカンスロープではあったが、腹部から腕にかけて乗る少年をいとも簡単に釣り上げ、地面へと叩きつける。

痛みよりも先に内臓が圧迫され、肺にある空気が口から抜けていく。その苦しさで意識が遠のいていくが、次に背中から伝わる激痛が良くも悪くも少年の意識を保たせてしまう。

後ろの狼も続くように少年に襲いかかる。

『やべ、痛そうな爪だなあ』

意外に冷静な自分に苦笑した。振り上げられる腕、先にある爪は確実に息の根を止めてくるだろうと、じっとその一連の動作をみていた。

『そういえば、あの人は逃げられたかな。ははっ、俺、何やってんだろ』

体がかかり出されていた。

どうしてか、そう、心の中の声が呻いては衝動的に突き動かされていたのだ。

『痛えなあ……あれ刺さったらもつと痛いんだろうな』

目をつぶる。

やはり恐怖心は拭えないために、鋭利なあの爪を見たくはなかった。

『……………』

「レックス!!」

誰かが少年の名を呼ぶ。
聞き覚えのある声だった。

幻聴か、と耳を疑う

「レックス！立ちなさい！」

『呼んでる、あの人が、俺を』

「レックス！」

見開く先。

かすむ視界に映る金糸の髪。

後ろ姿でしかないが、それはレックスの脳裏に焼き付いた強烈な印象は彼女が誰かをはっきりと認識させた。

「騎士様！！」

傍らに落ちた獣の腕。

ライカンスロープの腕を斬り捨てた後、即座に襲いかかる2体の動きを両手に持った短剣で止めているヴァレルヘリカ。

「今のうちです、逃げなさい」

腕を斬られた1体が怯んではいるが、その眼はレックスの方へと向いている。

レックスは瞬時に自分が足手まといの荷物と判断し、背中を見せないようにバック走でその場を離れた。

彼は確信している。

あの騎士が負けることは万一にもない、ということ。

ゆえにレックスは警備隊が誘導する通りへと走る。

ヴァレルヘリカは一息つく。

『賢明な判断です』

迷いなく駆けたこと。

そこには自らが彼女の負担になると恥も悔しさも捨てたことがある。なかなか出来ないことを彼はやってのけた。

僅かに唇を動かし、微笑する。

「願わくば、貴方方に救済があらんことを」

爪を弾き身体を地面すれすれまで降下。

後ろからの攻撃を見切ったのと同じように、2メートルを越す巨躯は視界から消えた彼女を探し出す。

まずは後ろにいるライカンスロープの足を斬ると、倒れ込む胸元にもう一方の短剣を突き刺す。

深く食い込んだ短剣をしつかり掴み、地面を蹴り上げると彼女の長

い足が狼の首を捕らえる。

起き上がり様に脳天への一撃。

完全に鼓動は消え、巨軀がばたりと地に伏した。

なお彼女の動きは止まらない。首を捕らえて時には他の2体が彼女を見つけ、襲いかかるが、倒れ込んだせいで、その動きを止めざる得なかったのだ。

肩を蹴って飛び上がったヴァレルヘリカは両手の短剣を投擲すると、それらは片や右足、片や肩へと刺さり、痛みからか唸り声を上げた隙を彼女は見逃さない。

既に握っている槍。

空中にいながらも、まるで振りかぶる様子もなく投擲。

先程投げた短剣のように牽制ではない、狙い定めた必殺の一撃。槍は空を切り、一閃の光となって1体の身体を完全に貫き、絶命させた。

残るは1体。

彼女の足が地に着いた。

何もする気配がなく、悠然と腕を組み、辺りを見回しては現状を整理し始める。

背を向けたまま。

これ見よがしに振りかざす獣の爪。

「カムバック」

言うが早く上げたままの腕が下ろされることはなかった。

貫き通した光の槍が、意志を持つようにして彼女の手元に戻ったのだ。

その軌跡の上、1体の狼がいたのは彼女の計算通りであるのか、振り向くことなく槍が戻ってきた感触を確かめると残ったライカンスロープがないか歩き始めた。

レックスが立ち去って実に10秒の出来事。

「見事ね」

控えめな拍手を送ると、少しだけ微笑む彼女。

あれから直ぐに事態は收拾がつき、負傷者は出たものの、騎士団長の指揮や騎士の迅速な対処によって死者を出すことだけは回避できた。

今では兵士たちと騎士のみが本部前に残って、警戒態勢に入っている。

本部内へと入り、登城するために奥へと進む中、口を閉ざした女王が初めてヴァレルヘリカに賞賛を贈ったのだった。

2人のみの空間。

本来なら更に騎士が数人付いての護衛を行うべきだが、女王たつての要望と、收拾がついたとはいえ警戒を解くことができない騎士達は押しに押されてのことであつた。

侍女であるマリアは負傷者の手当てに出てしまっているため、さらには本部にいる兵士たちも表にでているので、ほとんど無人状態である本部内。

「……………」

対するヴァレルヘリカは沈黙を守ったまま、女王の前を歩いていた。

「相変わらずなのね」

女王の口調は悲哀を含み、顔はかすかに俯いている。

カッソ、カッソとヒールの音が室内に響き、虚しさが漂っている。

「……………」

「……………」

返答を待っていても、たヒールの音のみが答えかのようにヴァレル
ヘリカは無言で続けた。

「でも元気そうでよかった。ちゃんと食べてる？休日はどうしている
の？」

カッン、カッン。

「身体には気を遣うのよ、こっちは心配してるんだから」

カッン……………」

「……………」

「え？」

「……………」

それは無視ではなく拒絶。

振り向いた表情は本来の彼女からは想像出来ないくらいに陰しく、
激情に駆られていた。

混じり合った負の感情。

全てが眼前の女王、アルテリッシュへと向けられている。

「……………」

「アタシのことは構わないでって前々から言ってるじゃない！！母
親ぶられると不愉快なのよ！」

溢れた醜い感情は御することができない。

溜めに溜めたものや、ストレスが一気に爆発してしまったのだから。

「何なのよ、アタシが心配？アタシが元気かって？よくもそんなこ
とと言えるわね！」

始まりと終わりを告げた、あの日を。

全てが砕け散ったあの出来事を。

叶わなかった、彼女の夢を。

一度たりとも忘れることはなかった。

「……………リカ」

それはアルテリッシュも理解しているのだろう。
彼女にとっても忘れられない日だから。

「こんなことまでしてアタシと話がしたいの？」

一枚の手紙。

いや、書状というべきか。

もともとこの国の女王に宛てたものだが、内容こそ国政と貿易についてだが、最後にはこう記されていた。

『娘を、ヴァレルヘリカを護衛に就けて欲しい』

ささやかな、そして、切実な願いだったのだろう。

そこだけがインクが滲んだり、ぶれていたりする。

彼女は何度も何度も迷った挙げ句に、震える体を押さえつけながら書いたのだ。

書状は先日ヴァレルヘリカの元へ送られ、その内容に憤りを覚えていた。

本来ならば内密にすべきだが、ヴァレルヘリカにとっては送ってきた女王に感謝したいほどだった。

「せっかく……に……これじゃあ、アタシは」

「リカ、その、あたしは」

「……お願い。もう、放っておいてよ、もう、アタシの前に……現れないでよ……！」

「……………」

悲痛で、小さな小さな叫びだった。

涙こそ流していないが、心の中ではきつと泣いているのだろう。

『優しくて、弱い子だから』

彼女の時間は動いていない。

あの日から止まってままだ。

「そうね……ごめんなさい」

どれだけ傷つけたのか、どれだけ苦しめたのか、痛いほど解ってるつもりでも、それは本人のみぞ知ること。

唇を噛み締め、ぐつと喉からせりあがって来る衝動を抑え、彼女は視線を下げた。

再びヒールの音が響く。

寂しげにカッン、カッンと。

以前よりも距離が開いた気がするのには、おそらくは気のせいではないのだろう。

談笑 かいわ

赤と緑を基調とした一室。

床には高級の絨毯を余すところなく敷き詰め、隅々まで手入れが行き届いている。

国旗として、薔薇に剣と盾が融合したデザインの旗紋が東西南北にそれぞれ立て掛けられており、緑の布が一際には赤を押し出していた。約10メートルくらいか、U字型の卓が中央に置かれて測ったかのように椅子が配置されている。

卓上は水晶か何か透明な色で、その上には資料が載せてあり、各々の椅子に合わせた数の。

席はすべて埋まっており、上質な衣を纏った年配者や重めかしい甲冑を身に付けた騎士が険しい表情の中、会議の場に似つかわしくない煌びやかな衣装を着た女性が丁度座ったところだった。

U字の奥側、つまりは真ん中の席に座した女性こそエルフ共和国シルターニヤ現首長アルテリッシュ・ミラ・リインその人。

「……………」

真剣な眼差しで周囲を見渡したアルテリッシュは誰にも気付かれないう安堵の息をもらした。

『納得はしていないけど、反論はしない、と』

シルターニヤの総意を頭ごなしに否定などは出来ないと踏んでの強
攻策と言っても差し支えない。

アルテリツシュから見て右手側、シルターニヤの要人達は立ち振る
舞いこそ堂々としているが、内心では泣き出したいはずだろう。

有り体としてはひどい事を言っただ。

文句の一つでもあてられてもおかしくはないが、内容の中には反論
をすることによってローゼス側には不利益な問題が生じる。

故にもどかしくも反論は言えず、その様子に彼女は苦笑してしまう。

『賢明ね』

彼女が先程発表したのは主にこれからの同盟国に対する外交につい
て、そして、自国の在り方を強調した。

一つ、外交について。

貿易、援助、議会への参加を継続するが、他国籍を持つ者の入国を
禁止とする。

輸入はトライアイランド外での港で行う。
故に転送魔法陣のいくつかを除去する。

一つ、自国について。

現在持ちつる戦力を排除し、最低限の警備隊を国の安全のために結成する。

なお、その際に【三宝創具】は魔導院、修道協会へ献上する。

以上の2つ。

普通に考えてもこれは同盟国間に亀裂を入れるものである。

あながち同盟破棄というのは否定できない。

しかし、同盟を結んだ国同士が簡単に手を放すことはできないため、外交を継続するのは否めないのだ。

生活必需品など輸入しなければならないし、資源も足りているわけではない。

幸いにも食物は事欠かない、むしろ輸出として益を出しているし、それらを必要とされていることを無碍にはできなかった。

そして、最重要事項は武力排除。

これは確実に叩かれると解っていたために切り札を使うしかない。

【三宝創具】

先の戦いで回収した魔剣を制御、封印するために創られた3つの概念宝具。

本来ならば携わることのなかったアルテリッシュが、数年前から参加し完成させた代物。

現在は彼女が全て管理しており、所有権は完全に一任されている。その一つを譲渡することはローゼスにとっては決して悪い条件ではないのだ。

彼女はこの件に関してはずっと思い悩んでいた。

力を手に入れた後には力の誇示、つまりは争いが起きることを。

それが大なり小なりであつても悪い方向へ傾くのは一目瞭然だろう。

しかしながら、同時に各国から常にアルテリツシュはバッシングを受け続けていたのもまた事実。

全ての概念宝具を持つ故に、牽制を入れてきたのだ。

それでも彼女は迷い悩んだ。

渡すべきではない。

例え叱責を受けても非難されようとも。

だが、ある一件が彼女の意思を強く押し曲げてしまった。

【天魔病】

一般的にはそう呼ばれる人が異形の怪物へと変貌する事態。

いつ頃だろうか

気付けばそれは一気に大陸に現れると無差別に人を襲い、一時は町が壊滅状態になることさえあった。

瞳が紅く染まるのは兆候。

欲望のままに悪徳を行い出す彼ら。

ウィルスに犯されたかのように人を狂わせるそれを人々はいづからか、天魔病と呼んでいた。

最近では先日のように徒党を組んで特定の誰かを襲うことも珍しくはない。

知恵をつけてきている。

さらに進行すると騎士すらも手を焼く程の力を身に付けていくのだ。

これにはローゼス、魔導院、修道協会が黙っていられず、三者が今まで以上にアルテリッシュを責め立てるせいで、彼女も色々と限界にきていた。

結果として三者にそれぞれ一つずつ与え均衡を保たせる、を条件として譲渡することを決定。

恐らくは喉から手が出るくらいのはず。

だからこそ彼らは黙認したのだった。

重苦しい沈黙の中

特にシルターニヤサイドは生きた心地がしないだろう。

この情勢の中、この表明ときている。

下手すれば大きな軋轢が生じるわけだと、内臓が締め付けられる思
いだ。

ガシャリ

静寂に包まれた空間に、重めかしい金属音がやけに響いた。

U字の上部、つまりは卓の空いている場所に、一際豪勢な一卓と座
があり、そこに敢然と座す者がいた。

細かな彫りと宝石や箔がおおいに使われた座に腕を載せた時に、彼
女の籠手が鳴らした音が一室に聞こえ、ほぼ全員が反射するように
見向く。

一番に思うのはその容貌。

全身は紅で染まった重厚な鎧を纏い、一切の地肌を見せることはな
い姿。

顔すらも兜を被ってその表情を窺わせることすら叶わない。

背には白きマントを付け、座しているのにマントはおよそ地面すれ
すれの位置に及んでいた。

「アルテリツシュ様」

兜内からの声音は内部で幾重にも反射したのか、それは高くなお低

く互いに複合した音として、彼らの耳に入る。

「はい、ローゼス王」

彼女こそイヴ・ローゼスその人。

もはや旧知の仲であるアルテリッシュでさえ、彼女の素顔を十年以上も見たことはなかった。

それがどうしてもイヴをイヴとして認識させ難く、今でも眼前の鎧の騎士は別人ではないかと当惑してしまう。

「……………」

「……………」

またしても沈黙が広がる。

先よりもさらに重く気を失いそうな重圧感がある。

だが、この沈黙は一分ほどで終わりを迎えた。

次に発したイヴの言葉に場は取り乱したようにざわめいたのだ。

レックスは辟易していた。

あのライカンスロープ襲撃以来、彼の勇敢な行動を目にしていた市民が連日レックスの元に来ては、賞賛と感謝の言葉を浴びせていたのだ。

最初こそは照れや嬉しさがあったものの、次第にどう対応していいかわからなくなり、あまつさえ現在では逃げるようなことをしている。

「だつてなあ……」

ため息一つ。

レックスにとっては当然の行為を普通じゃ出来ない、勇気ある行動と賛美されてもいまいちピンと来ない。

それではまるでレックス自身の考えを否定されているような気さえした。

「俺が変わってるのか？」

そう思いたくはない。

誰かを助けるのに理由はいらないし、目の前に困っている人がいたら手を差し伸べるのが当たり前と育ってきたレックス。

だから、パリバートの市民が少しだけ軽薄のように感じた。

見てみぬフリをする彼ら。

どうしてだろうか。

レックスには理解できなかった。

ふとそんな時

「よっ、勇気ある失礼少年」

後ろからかかる声に振り返ると、そこには

「お、お前は…」

「ふふん」

男は鼻を鳴らして笑みを浮かべる。

だが、男の期待とは裏腹にレックスの導き出した答えは

「あの、どこかでお会いしましたか？」

少なくとも見知った顔ではなかった、とレックスは怪訝な顔つきで
おずおずと男を見る。

彼は何故だか盛大にずっとけていたのだから、見下ろす形にはなっ
てしまったが。

「え、ちょ、本気？冗談とかでしょ？」

「あはは、かなり本気だったり」

「お、おま、ホントに失礼な奴だな？」

「あ、はあ」

「チクシヨー、何で俺だけ覚えていてお前は覚えていないんだよ。
何かちょっとだけ寂しいだろうが」

大袈裟に肩を落とすと、うなだれてしまう。
盛大なため息をこぼして、だ。

「そんな傷心した俺に、お前は何か声をかける。そして、手を貸すか何かしろ」

「……………」

腕を組み、思考に思考を重ねるレックス。

「そんなにうなり声出して考え込む必要があるのか？」

単純に手を貸してあげるのが一番なのだが、レックスの脳内では何を思ったのだから、満面の笑いを見せ

「グッバイ！」

彼は迷わずに駆け出した。決して後ろを振り返ることなく。

「待て待て待て！」

「え？」

「え？じゃないからな！今すげー失礼なことしてるからな、お前」

いつの間にか男はレックスの肩を掴み、泣きそうな顔をしていた。しかし、レックスはというと踵を返してまた歩き出す。そして、5メートルほど離れた時だった。

「さようなら？」

ためらいがちに手を振ってみると、今度は間髪入れずに

「待て待て待て！違うだろ？さようならはくない？」

『面白い人だな』

「せめて話を聞くとかしようよ、な？」

「いや、まあ」

「よし、あそこの広場で話をしよう！そうしよう！」

言うが早く男はレックスと肩を組んで、なかば強引に足を運ぶと、とりわけ用事もなく暇なレックスとしては

『面白い人だし、ちょっと話すんのもありか』

と内心ではこれまたどうして楽しい気分であつた。

広場はそれなりに大きく、ベンチがちらほら設置しており、花壇が周りを囲んでそこから様々な花をうかがうことができる。

昼にも未だ満たない時間帯であるために、広場はやや閑散としていてベンチに腰掛けていたのはレックス達だけであつた。

「ほらよ」

男はレックスを先に行かせ近くにあった酒場に飲み物を買ってそれを渡した。

もちろんグラスに入ったそれはアルコールの類ではなく、果実を搾ったものであり、程よく冷やされている。

「あ、ありがとう」

掌から伝わるグラスに付着した水滴と冷たさ。

すると彼はすぐに喉に乾きを覚え、一気にそれを飲み干した。

「後で金な」

「……………」

「奢りだと思っただか？」

してやっただりの顔をした男。

恐らくは先程の仕返しというわけなのだろう、悪戯にニヤニヤと笑っている。

「じゃ、返す」

「え？」

レックスは躊躇わずに指をのどの中に入れようと

「わー、待て待て待て！悪かった、冗談だつて！」

「……………」

「お前、容赦ない性格してんなあ」

男は苦笑してグラスを傾け、口の中に果実の飲み物を流していく。
濃厚な甘い香りがこちらにまで及んでいる。

「うん、うまい」

「それで、話つてのは？」

「ああ、お前いつか騎士団本部前で馬鹿なくらい舞い上がっていた

経験ないか？」

レックスが騎士団本部に行ったのはおよそ二回。

初めての時と、先日のライカンスロープ襲撃の時。

後者で舞い上がった覚えなどなく、前者としてはパリバート入りが鮮烈だったためによく覚えてはいなかった。

だが、確かにそんなことがあった気がした。

「なんとなくだけど」

「そんな時、ちょうど俺は騎士団に志願書を提出していてな、その帰り道お前が俺に絡んできたわけだ」

説明を聞き、今まで釈然としていなかったレックスだったが、ふと、記憶がその出来事を呼び覚ました。

「あ」

「やっと思い出したか」

「あん時はよくもやってくれたな……！」

思い出の中で一番印象に残っていたのは関節をきめられて痛い思いをしたのと、つんのめって痛い思いをしたこと。

「めっちゃくちゃ痛かったんだからな！」

「明らかにお前に落ち度があったんだがなあ……うん、俺もやりすぎたんだな。すまなかったよ」

「う、いきなり謝られても」

それこそ毒気を抜かれた気分になった。

「あん時は俺も色々あってよ、ついな」

「そっか、じゃあ俺も謝っておくよ。なんとなくだけど」

「なんとなくかよ!!」

「……………ぶっ」

「くくっ」

「「あははははは！！」」

久しぶりだった。

レックスにとってパリバートに着てからというもの、気を許せるような友人はいなかった。

笑うことはあっても、それは本心からではなく、今のようになんげを上げて笑うこともない。

自然とレックスの眼から涙が流れていた。

「あは、はは」

彼もまた緊張していたのだ。

旧知の仲であったロイとは仲違いをし、パリバートに着てからはその責に苛まれていた。

親しい友人も怖くて作れず、不安で不安でしょうがない日々が続き今日までを過ごした。

『ああ、そっか』

すっかり忘れていた。

『こんな簡単なことなんだ。近付いて話をすればいい。一緒に笑うだけでいい』

だから今、レックスは笑う。

泣きながらもレックスは笑う。

隣では男が肩組みをして小突いてくる。

あえての気遣いなのだろう。

それがとても、とても心を暖かくしてくれた。

愛情 ほづよう

騎士団本部。

王城に連結するこの建物は、ローゼスが誇る騎士や騎士を目指す兵士達の総本山である。

創設こそ数は少なかったものの、志願者は年々に増して、今となつては数千にも及ぶ。

基本的には兵士達は騎士の下に、つまりは部隊に入隊させられそこで訓練を受ける。

6ヶ月に渡る訓練を修了すれば、晴れて兵士としてローゼスから認定される。

そうなければいよいよ任務、仕事を請け負うことが可能となり、地位や名声を上げるチャンスとなる。

忘れることなかれ

騎士団に掲げられし言葉

『汝、己が信念を貫け。汝、誰がために在ることを忘るるな』

それは盟約。

それは誓い。

それは初志。

最も重要で、最も必要なこと。

その言葉を胸に、志願する者はローゼスにとってこれ以上ない兵士なのだ。

そして、21の騎士。

彼らこそ数千にのぼる兵士達の頂点であり、目指すべき指標。

ゆえに、騎士に憧れて入る者達も決して少なくはない。

中には騎士に命を救われた子供が後々に入隊することもある。

ああいう風になりたい、と。

青く、真っ直ぐな意志をもって。

そして、ここにもその一人がいた。

リカード・スイヴァルク

三年前、彼が住んでいた村が強力な魔物に襲われ、壊滅状態まで追い込まれた。

その惨劇を目の当たりにしたりリカードは恐怖のあまり魔物の前で腰を抜かしてしまっていた。

彼の傍らには地に倒れた両親が、血だらけになりながらも互いの手を取り合っていた。

もはや虫の息。

それは誰から見ても一目瞭然なこと。

親の死とともに自らの命も散っていくと諦めかけた時だった。

閃光と表現するだろうか。

忽然と魔物の前、リカードの前に颯爽と現れた女性の姿。

そして輝く金系の髪が人の体から成せる技とは思えないスピードで魔物を翻弄し、瞬く間に討ち滅ぼしたのだ。

彼女こそがヴァレルヘリカで、リカードの中で一生刻まれることになった鮮烈な印象だった。

そこからは最早リカードの瞳には彼女しか映らず、次々と魔物が討伐され、リカードや両親、村人が救護隊に運ばれて手当てを受けた。

死傷者28名、負傷者32名、うち重傷者11名。

結果としてみれば、対応が悪く被害も大きいと悪評を彼女一人が受けた。

リカードはと言うと傷も深く、何より失血し過ぎたために、両親は亡くなり、自身は施設へと預けられることとなった。

突きつけられた両親の死はリカードを酷く困憊させ、追い詰めてしまった。

ゆえに捌け口が必要だった。

それは村人たちも同じだったのだろう。

そして、騎士はただ頭を下げていた。その美しい顔が苦渋に染まっていたのをリカードはよく覚えている。

その時は許せない気持ちで、ざまあみると、もっと苦しめと思って

いた。

彼女は非難され続けた

対応が遅い、何をしていた、もっと早く来れば、など

酷い時は男たちから慰め者になれと襲われかけたこともあった。
怒りはすべて彼女に向けられ、リカードもまたその一人だった。

事件は片付いた。

ヴァレルヘリカには罰を課せられ謹慎と始末書。

納得はしなかったが、その頃にはリカードの怒りは沸かなくなっていたのだ。

忘れよう、と

それから一年が過ぎた頃、彼の施設生活は特に苦もなく順調だった。
事件は既に過去のことと割り切り、何か新しいことを始めようとした矢先。

施設に、リカードを訪ねたある兵士がいた。

彼はリカードと2人つきりにして欲しいと願い出、望み通りに客間へと運ばれた。

挨拶の時に、兵士が元ヴァレルヘリカの部下であると聞いた時には頭に血が昇りかけたが、なんとか抑えることができた。

兵士を無理矢理追い出してもよかったが、リカードは何故か彼の表情に何かあると思い話だけ聞くことにした。

『あなたはまずヴァレルヘリカ様があの事件を担当していると、そうお思いでしょう。』

ですが、今から語るのは全て真実です。あなたの矛先が見当違いであることを自分は証明したい』

兵士はすらすらと話し始めた。一字一句間違うことなく、詰まることなく。

『その日、ヴァレルヘリカ様が当たったのは別の任務でした。滞りなく任務は進み、無事に終えることができました。』

自分たちも当時はあの方の下にいたので、報告書やら何やらでパリバートへと戻る途中のことでした。

近くで悲鳴が聞こえたのです。そう、あなたの村に魔物が襲撃した事件ですよ。

状況は最悪でした。

駆けつけた時には手遅れの者が数人はいて、なお増える負傷者。救護班がいなかったために近くの町へ搬送しなければならない。

多くの者が亡くなりました。本当に辛い事件でした。

しかし、あの方はあなた方に何もおっしゃっていなかったでしょう？責任はあの方にある、いえ、違います。

あの方が自ら責任を負ったのです。

実はあの日、その任務にあたるべきだった兵士達は運悪く同様に魔物の襲撃にかかり道中で命を落としてしまったのです。

しかし死にゆく者達が任務失敗の責を負うとはどういうことかわかりますか？

名誉ある死？とんでもない！
侮蔑ですよ。ただひたすらの。

あの方はそれが耐えられなかったのでしょうか。誰よりも他者の痛みが分かる方です。

だからあの方はその事件を自らの担当に書き換えてしまい、非難と罰を受けることとなりました。

謹慎だけで済んだのはあの方の地位や信頼があつてこそでした。

それからですね。

今君がいる施設、ここですね。多大な援助金が投資されるようになったのを知りませんか？

あの人ですよ。

他にも数え切れないほどの支援をあの方はしているんです。

もちろんこのことは内密にと、口を酸っぱくしておっしゃいますがね。

自分は嫌なんですよ。

あんな優しく若い女性が苦難にあえぐのを。

だから、どうか許してやってくれませんか？

お願いします。』

リカードは後悔と自責の念にかられた。

どうして自分はあるなに辛くあたってしまったのか、と。

そして彼女の見えない恩恵をなにも知らずにただ受けていた自分に腹が立った。

だから恩返しをしたい、そう思ったのは必然なのだろう。

彼女に会いに行った時に彼女はこう言った。

『私にとって恩返しというものは、本人に返す物ではなく、他の方に貴方の持てる限りの力で返すものです』

驚きを隠せなかった。

まずあの事件で不当な扱いを受けた彼女は気にする素振りすら見せなかったのだから。

それどころか、他者に対して恩を返せと言う。

心が打たれる思いだった。

だからこそ、リカードはその時に強固な決心をした。

この人のようになりたい、と。

他者を助けてあげたい

これ以上自分みたいな境遇を持った人を出さないためにも。

強く強く、彼は望む。

騎士になりたいと。

「ってわけなんだい」

暇がてらに付き合っちょつとだけ話を聞くつもりだった。
何となくリカードが騎士団に志願した理由を尋ねただけ。

思いのほか、重い話になってしまい途中気まずい空気が漂っていたが、最後の結末を聞いたあたり、レックスにも思い当たる節があった。

『騎士様は辛い道ばっか歩いているな』

レックスの時も似たような状況だった。

改めて騎士の、いや彼女の強さがわかったような気がした。

「カッコいいなあ」

ついこぼした本音。

自然と口から出た言葉は隣にいたりカードにも聞こえたらしく

「かなり、な」

彼も応じた。

2人の共通点はこんなところにあったのだ。

「実は、さ……………」

そしてレックス自身も自らの境遇を語った。

最近のことだったが、レックスは終始懐かしむように、どこか遙か遠くを見つめていた。

「つてのがあった」

詳細までは言わない。

話したくないのはもとよりだが、どちらかというと彼女、ヴァレルヘリ力を中心に話を進めたから。

だから一通り話し終えた時に、間髪入れずにリカードは興奮した口振りでこう言う。

「くう……最高だ！やはりヴァレルヘリ力様は最高だ！」

レックスも頷き返す。

「ああ、それは同意できる」

「何であんなに綺麗で優しく、お強いのか」

「ちなみに、俺の理想だ」

「ふっ、何を言うかと思えば……俺もだ」

「ど、同志――！」

2人はしっかりと握手すると肩を組み合い、意気投合した。

「お前はわかる男だと思ったんだぜ！俺は」

「任せろ！」

「改めてリカード・スィヴァルクだ。よろしくな」

差し出された右手。

すぐにそれを握り返すと

「レックスだ、よろしく頼むよりカード」

「おう、レックスな！」

そして、再度2人は語り合う。もちろん、話題の人は1人しかいない、互いに知ってる情報　とは言ってもレックスはヴァレルヘリカについてはほとんど無知状態のため、リカードが主にレックスに教えていく
を交換し合う。

本来なら軽く話をつけるはずだった2人であったが、盛り上がってしまった会話は途切れることなく続いていき、気が付けば夕刻前になっていたのはそれほど満たされた時間だった。

少なくともレックスはそう思っている。

結局、2人は近くで食事をとって別れることにした。

そうして帰路につくレックスの背中、リカードは手を振りながら大きな声で

「レックス――！！また会おうなあ！」

何気ないこと。

ただレックスにとって、また会おうという言葉がどうしても胸に染み込んでいく。

ほのかにあつたかくなった心で、彼は歩いていった。

同時刻。

暗がりの一室にて

日が沈み部屋に明かりを灯すことなく、闇に染まる室内。

太陽と月が交代した時。

物静かに照らす蒼い月が、丸く輝いていた。

射し込んだ月明かりの下、窓に手を当て1つの人影が浮かび上がっている。

女性だ。

見目麗しい姿が照らされ、まるで月夜に舞い降りた星の姫のよう。髪は黒く、されど鋼のごとき光沢を帯びて控えめに輝いてる。

蒼い月を映す瞳は真逆、対をなす色。燃える深紅。

魅入られてしまう魔力めいた双眸は悲愴に満ちているが、かえってより一層彼女の神秘性を増していた。

そして髪に合わせ、体のラインがはつきり出る黒衣を纏う彼女の体は未発達でありながらも艶めかしい。

上半身を見れば拘束されたイメージを持つてしまう。

それほど彼女の黒衣は彼女の腕、腹、胸に至る部位を縛り上げるXを描いている。

下にスカートを履いているために拘束されたイメージはここで払拭されるだろう。

ふと、彼女の唇が動いた。

すると目の前にはスクリーンが表示されてある人物が映し出される。

アルテリッシュだ。

彼女は明日の朝にパリバートを発つらしい、スクリーン越しからの

会話で聞き取れる。

相手は侍女のマリアであろう。彼女がプライベートでも親しくするのは今ではマリアくらいなのだから。

「……………」

深紅の瞳はずっとアルテリッシュを見てやまない。

悲愴だった色が一転して、この時の彼女はとても幸福感に満ちた顔で微笑んでいる。

「ローラ、いるか？」

ノックも無しに一室へと入るの男性。

月明かりの届かない、ドア先に立っている彼の声が部屋に響いた。

彼女は慌ててスクリーンを閉じる。

幸いにも背中をドアに向けていたために、アルテリッシュの姿を彼に見せずには済んだ。

「明かりも点けないで何をしているんだ？」

そう言う彼もまた明かりを灯すことなく2つ置かれた簡素なベッドに腰掛けた。

安っぽい軋みを上げたが構うことなく体重を乗せる。

軋みがまるで悲鳴だな、と彼は苦笑する。

「……………」

彼女は答えない。

空に浮かんだ雲と、月をまじまじと見つめていた。

対して男性は気にすることもなく再び彼女に話しかけていく。

「今宵は月が綺麗だな」

近くのテーブルに置かれた安物の酒瓶を手にとると、一口軽く喉に流す。

まずくはないが、旨くもなかった。

渋った顔でそれをテーブルに戻すと

「月見に一杯ですの？」

いつの間にか彼の向かいのベッドに腰掛ける彼女は声だけ笑いながら問いかけた。

「言っただろ、今宵は月が綺麗だって。たまには呑むのも悪くない

「思ったんだが」

ちらりとテーブル上の酒瓶を一瞥すると

「進まないんだな、これが」

「フフ…」

「何だ、お前も呑んでみるか？」

親指で酒瓶を指すと、彼女は掌を彼に向けて

「いいえ、お酒は嫌いですわ。お酒飲みも嫌いなの」

辛辣な言葉を発した。

男性は吹き出し、頭を掻くとわざとらしくため息をついた。

「はぁ……全く、お前は手厳しいぞ、いったい誰に似たんだかな」

「さあ、誰に似たのでしょうか？うふふ、お父様はきっと身に覚えがあるのではなくて？」

「くっ、本当に可愛げがない娘だ。親の顔が見てみたい」

「ホント、父親の顔をまじまじと見てみたいですわ」

言って彼女は向かいのベッドから立ち、彼が居るベッドへと移った。
正確には彼に抱きつく態勢である。

「おい」

「はい？」

「何してる？」

「さあ？」

「抱きつくな」

「よいではないですか、家族なんですから」

「お前、親しき仲にも礼儀ありって言葉知ってるか？」

「仲は仲間の仲ですし、あたくし達は家族でしょう？どちらかという中ですわね」

「……………」

「あらあら、お父様ったら。そんなに力を込めてあたくしを剥ごうとしないで下さいます？」

彼女の身体、というより背中に戻した腕がぎゅっと力を増す。

引き離そうとしていた彼はその後からの締め技を喰らうことになり、カエルのような声を上げた。

「は、な、れ、ろ」

「イヤですわ」

周りから見れば仲むつまじい2人であるが、互いの腕にはかなりの力が込められブルブルと震えている。

男である彼と拮抗しているのは彼女の腕力が強いというわけではなく

『照れ隠しですわね』

彼女は悪戯な顔で笑う。

嬉しいのだ。

口では離れてと言う父親が本心ではこのままでもいいと思っていることに。

現に力を抜くと、彼女が一気に離れてしまったため、彼も即座に力を抜いている。

結局は父娘のじゃれあい、愛情の表れなのだから。

「はっ……はっ……」

「もうへばってしまいましたの？」

最終的には彼はわざとらしく息を切らせて、彼女になすがままになつていた。

より強く抱きつき父の温もりを味わう娘。先ほどよりも幸せに満ちた表情で心が安らいでいる。

「くつつきすぎだ」

「照れないで下さいまし」

「いくら娘だからって変な所が当たっていると俺としては困るんだ」

わかっている。

彼女はあえて自らの身体、主に胸を寄せ付けているのだ。

発展途上ながらも順調に育っている彼女の膨らみは同年代よりも上であろう。

彼女はよくそれを武器に父をからかうのが好きだった。

「お母様に比べたら小ぶりでしょう?」

「……………」

「……………」

「いや、そんなこと」

「今の間が答えになっていますわ」

「え……………」

「どうせ小さいな、とか思っているのではなくて？そんな洗濯板じや無理無理とか」

「お前は卑屈なのか、何なのか、たまに分からなくなるよ」

「ふん」

彼女はふいっとそっぽを向き、腕をほどくと彼の足の上に体を乗せた。

しかしそれは彼女にとっての合図。

呆れながらも笑みを浮かべてわずかに頷くと彼は娘の頭を撫でた後、優しく包み込むように抱く。

まるで恋人のように。

そこには確かな愛があるように。

丁寧に紡がれる彼女の名前

「ローレライ」

彼女は答える。

今度はきちんとした声で

「はい、レインお父様」

レインは名前を呼ばれると、どこか哀しげに俯き、少しだけ抱きしめる力を強めた。

もれるローレライの吐息が、きっとレインには聞こえていなかったろう。

虫がさえずる夜の中、帳が見える月夜の光が2人を包み込む。太陽の光の元ではいられない、2つの黒い髪がそつと揺れていた。

憂苦 かなしみ

それが夢だと気付いたのは目先に自分がいたからだ。

思い出。

懐かしい記憶が夢となっている。

ヴァレルヘリカが見ている夢は当時、まだシルターニヤに居た頃の記録。

彼女は記憶というフィルムから映し出された自分を客観的に捉えている。

明るくよく笑う彼女が今の自身とは似ても似つかない、むしろ別人のように思えたから。

頬を染めてはにかむ彼女が、今では信じられない光景となっている。姫君という立場でありながら、ドレス姿で駆ける彼女を臣下達が見れば卒倒してしまうであろう。

はしたないと思いつつもはやる気持ちが抑えきれなかった。

そう、あの大樹へと向かって走っている自分。

大好きな人が、そこにいるから。

「どうした？そんなに急いで、何かあったのかい？」

大樹の傍ら、日陰に彼は腰を下ろして読んでいた本をそつと膝元に置く。

足音が聞こえていたので、ヴァレルヘリカがたどり着く前には視線は彼女にあった。

そうして、彼は手招きをして彼女を自らの隣へと促す。

「ほら、こっちへ来て落ち着きなさい。お姫様がそんな様子じゃまずいだろう」

「ごめんなさい、お父様」

彼女はすぐにと彼の隣、肩が触れ合うほど近くに座り込む。心なしか顔が上気しているのは恐らくは走ったせいではないだろう。

ヴァレルヘリカは物言いたげに視線を送る。それに気付いた彼は微笑みかけて

「話が見たいのか？」

彼女の想いに応えた。

嬉しさのあまりに抱きつきたい衝動に駆られたが、何とかこらえることができた。

「はい、またいつもの……昔話をお願い出来ますか？」

控えめな問い掛け。

縮こまって弱々しい彼女の姿は少女そのもので、愛おしくもある。たがらこそ、彼、レイン・エリシオンは快く首を縦に振った。

「いいよ、今日は何を話そうか……ううん、まだリカに聞かせていない話はあったかな？」

レインは少しだけ困った笑顔で必死に頭から記憶を手繰る。しかし、ほとんどが吹聴済みのものばかり。

「じゃあアル、母さんとの出会いを」

「イヤです」

「即答か……」

「どうせお母様とのノロケになるんでしょう？そんなのイヤに決まっています」

頑なに拒むヴァレルヘリカ。

決まってアルテリツシュ、すなわち母親の話になった途端、話題を変えたり不機嫌になる彼女はいつも難しい。

諦めたレインはというと、自身の七騎士時代を題材に上げた。

すると彼女は目を輝かせて、食いついてきた。

「よし！ーじゃあ、どこから話そうかな」

「最初からお願いします！」

「え、最初って………物凄く最初になるんだけど」

何せ七騎士時代はそれこそ師である円からの訓練から繋がるものだったため、話としては途方もなく長くなる。

さすがにそんな長時間も話すのは出来ないので、レインは一つ妥協案を出す。

「ごめんな、今日は七騎士に入った後の」

「初めから、ですよね？」

有無を言わさぬ笑顔だった。

血は争えない、そう思ったレインはヴァレルヘリカが実によく母親に似ていると実感した。

だから余計に彼女が愛おしくなり、アルテリッシュの子、自分の愛娘であるのに気付かされる。

「わかった、わかった。でも今日は夕刻までだからな、それを過ぎると俺がアルに絞られるんだから」

「……………」

途端に不機嫌を露わにするのは可愛らしく思えた。

しかし、レインは意地悪するつもりなどさらさら無く

「代わりに明日も明後日も話が続くぞ？覚悟しておくことだな」

だから彼女も一瞬で顔をほころばせて

「は、はい！約束です！」

今度は抑えることなく、レインの胸へと飛び込んで行った。

レインとしても年頃の娘、それも親バカを差し引いても十二分に美人と言えるヴァレルヘリカに抱きつかれては、恥ずかしいものがある。

照れて頭を掻くが、そのまま話しを始めた。

『そう、とても幸せだった日々。儚く碎けた私の夢』

空間が白みを増し、ぼやけだすのはきつと意識が現実へと向かっているから。

夢から醒めるのだ。

いまだにぼんやりとだが、2人は笑い合っている。

寄り添う姿は幸福の証だった。

早朝

告鳥も1日の始まりを告げない時間

日も上がってない、下手をしたら夜と言っても差し支えない中、数人の騎士達に囲われてアルテリツシュはパリバートを発つために馬車へと乗り込んだ。

「お気を付けて」

「ええ、ローゼス王には宜しくと伝えておいてくれるかしら？」

「もちろんです」

「ありがとうございます、ご苦勞様」

「それでは」

頃合いを見計らった行者が手綱を引いた。ゆつくりと馬車が動き始める。窓からは未だ騎士達が立ったまま微動だにしていない姿が窺えた。

「優秀な騎士ね」

「選りすぐりの精鋭達ですからね。ローゼス王からの信頼も厚いようですよ」

対面に座るマリアが答えた。

独り言のようなものだったが、聞こえていたらしい。

「そうね」

相づちをうたれて会話が終わる。マリアは何となくその理由がわかっていた。

沈黙がおりた中、無言でアルテリツシュは窓の外を見ている。誰かを待つように。

「……………お嬢様と何かあったのですか？」

口を開けたマリアは率直な質問を投げかけていた。失言だとわかっていながら。

アルテリツシュは視線を離さないまま、静かに

「ええ、怒られちゃったわ。もう二度と顔を見せるなあ、って。書状がリカの元にも行ったらしくてねバレちゃった」

「っ……………酷すぎます」

それはヴァレルヘリカに向けてか、ローゼス王に向けてかはわからない。

マリアの表情は暗く、こらえきれない悲痛なものだった。

「いいの、あたしが間違っていたんだから」

その言葉にマリアは反論したかったが、彼女の悲哀に満ちた笑顔が口をつぐませてしまっていた。

重たい空気が流れる。

どちらとも閉ざした口を開けることなく、車輪が軋みを上げ、揺られながらも馬車と時間が進んでいった。

馬車がパリバートを出た時にある動きを感知したのはヴァレルヘリカだった。

動きというよりは魔力の奔流が研ぎ澄ましていた感覚に知覚した。

早朝にもかかわらず、彼女が精神集中をして座していたのは夢から醒めて寝付くことができなかったから。

乱れた髪を整え、一束に結うと彼女はやることもなく探知に入っていた。

魔術師ならば知った相手の魔力がどういったモノかが解る。

人によつての感じ方は異なり、ヴァレルヘリカの場合は色付きの水流に見えるらしい。

彼女は時間さえあれば常に探知を行い、目当ての魔力を探していた。人物が動けば魔力に変化があるわけではない。

もちろん魔法を使用し、なおかつ知覚範囲内での魔力の入出によつて初めて感知される。

そして、今、真っ赤に染まったビジョンブラッドの水流がパリバート付近に流入していた。

「来た!!」

彼女は一目散に駆け出す。
間違いない。

探し求めた目的がついそこにいるのだから。

「逃がしません、今度こそ」

冷笑する彼女はとても残酷で

「殺す」

まるで本来の彼女とは別人であった。

馬車は停車していた。

アルテリッシュが行者に無理に頼んでいたから。

彼女ももちろん探知可能で、付近であればゆうに知覚できた。
覚えのある魔力。

当てはまっただのは1人しかいなく、馬車から降りたアルテリッシュは後ろでマリアが何かを言っているのも耳には入らなかった。

体が自然と動いた。

何故か宙を浮いているような感覚で、進んでいない錯覚に陥る。

実際は確かに踏みしめ前進しているのだが、ひどく長い道にも思えた。

しかし、その道のりもやがては終着点が存在する。

慣れない獣道を駆け抜け、道中の草木をかき分け、抜けた先には草原が視界いっぱい広がっていた。

夜故に虫がりんりと鳴いている。

今夜は満月。

蒼く照らされた草原は草が反射して幻想的な雰囲気醸し出している。

そこにぽつんと二つの影が並んでいた。

姿形が見えずともわかる。

それらが何だかを。

誰だかを。

アルテリッシュは叫ぶ、目一杯に2人の名を、愛する名を。

「レイン！！ローラ！！」

その刹那。

丁度彼らの間に立ちふさがる者が現れたのは。

それは草原にいる三者がよく知る人物であり、最後のピース。

6つの瞳からの注目を受けながらも、彼女は内その2つを睨みつけている。

「シャイニンググライド【光の軌跡】」

紡いだのは投げかける言葉でも、叫びでも、ましてや挨拶でもない。上級魔術。

ためらいなく1人に向けて、詠唱すらない間髪入れずの攻撃だった。

最初に動いたのはもう片方の男性。

隣の女性の体を抱き込むと、素早い動きで光の魔法を避けていた。次に動いたのはアルテリツシュ。

「シエルプリズン【鋼殻牢】」

形成した魔法陣が最初に魔術を唱えた者の目下、地に光りを放つと、一気に彼女を囲って展開された。

対象者を閉じ込め無力化させる結界魔法の一つ。

解除にはある程度の時間がかかるだろう、いくら彼女と言えども

「リカ！あなた、何を！」

閉じ込めたのはヴァレルヘリカ。

光の軌跡を放ったのも彼女。

向かいにいる2人もその様子を窺いながらも近付いてきていた。
アルテリッシュも今はヴァレルヘリカのすぐ傍にいる。

「リカ……」

「姉様……」
あねさま

月光が2人を照らし、その顔をさらけ出した。
レイン、そして、ローレライ。
皆が望む望まなくとも、運命は残酷で、皮肉にもここに家族全員が揃ってしまっていた。

「くっ、邪魔をしないで下さい！」

空間が裂き槍が具現。

間もなく投擲するが、しかし

激しい金属音が鳴るのみで結界には傷一つすらない。

ならばと手に込められたら魔力

それを一点、人差し指に収束させる。

シャイニングライド【光の軌跡】
コンバージェンシー【収斂】

複合魔法。

それも上級魔術の複合を使用した二つが更なる魔術を生み出す。

「デイベインレイ【裁きの閃光】」

貫穿する光の一閃。

煌めいた時には結界を突き破り、なお勢いはやまず矛先にはローレライ

アルテリッシュが何か叫ぼうとしたが、声になる瞬間

には既に超速の光がローレライの眼前に

「な……」

いない。

確かにそこに居たはずのローレライが見る影もなくなっていた。予先を失い、ただ直線する光は彼方へと消えていく。

「何処に！」

左右をはじめに確認した時

「リカ！止めるんだ！」

15メートル程離れた地点。

元居たところより右に大きく距離をとったのはローレライとレイン、さらにはそこにアルテリッシュも駆けつけていた。

三者が揃い、ヴァレルヘリカのみが対立する形。

だがしかし、彼女の闘志は鎮まるところか、逆に氣量が膨れ上がっているのがわかる。

怒りの形相。

予想だにしない、彼女の剣幕に三者はたじろぐ。

「リカ、止めなさい！こんなことって……あなた達は血の繋がった姉妹なのよ！」

「黙れッ！！」

「……………っ！！」

「許せないのです。私は、その女を……殺す」

「リカ……………」

力無く座り込んだアルテリッシュ。

その様子を憂いたレインは静かに問いかける。

「どうしてっていうんだ？お前らしくもない」

「…お父様」

「そんなにローラが嫌いなのか？そんなに憎いのか？どうしてだ？」

「っ、貴方には分かるわけありません。私の気持ちなど知る由も！」

「だからといって殺すのか！この馬鹿娘！」

「！！……………っ、う」

「お前は我が儘なガキじゃないんだ！いつまでもいつまでもローラを目の敵にして、いい加減にしろ！」

ついにはレインも激情する。

ヴァレルヘリカにとって初めて目の当たりにする父親だった。

ゆえに彼女は言葉に詰まり、一歩退いてしまう。

父親に叱られた幼い子供のように、顔を歪めて泣きそうにもなった。

「お父様、今、なんて」

「……………」

「うそ。な、んで、なんで、何であたしが怒られるの？」

信じられなかった。

彼女はただの一度も実の父親から叱られることも、怒りを買ったこともなかった。

初めての体験。

特別な存在だった、一番大切な人から突き付けられたのはナイフのようで、鋭い痛みが走る。
頭を抱える。

「うそ、うそ、嘘！！」

痛みは次第に全身にまで及び、頭痛が激しく彼女を苦しませる。
呼吸もままならない。

「あ……あ……う、うう」

虚ろな瞳の先。

2人が彼女を見下ろしている。レインは冷めた目つきで、ローレライは哀れみをあらわに。

「お父様、姉様が！」

「……………」

「何て惨い！お父様を信じていたのに、何であんなことを……………」

「お前は殺されかけたのにそんなことが言えるのか」

「姉様はあたくしにとって実姉ですよ！姉様の苦しみはあたくしの苦しみと同義ですわ！」

言うが同時、ヴァレルヘリカのもとへ駆けつけようとするが、レインの手がそれを阻まれてしまう。
きつと睨むが、意に介さずレインは

「放っておけ」

冷酷な一言だった。

わざとらしく聞こえるように意図した声量で、さらなる深みに突き落とされたのは言うまでもなくヴァレルヘリカだ。

「うう、う」

ローレライは母親と姉を交互に見やった。

どちらか一方に行かなければならないのなら、と天秤にかけるまでもなく

ひどく辛い思いをしている姉に決まっていた。

「姉様っ！」

「ローラッ!!」

あまりの剣幕に身体が強張る。恐る恐るレインを見ると、意外にも彼は負い目を感じたように暗い表情を浮かべていた。

娘だからこそわかる。

彼の思いがまる伝わってくるのだ。

「お前はアルを」

「……………わかりましたわ」

ローレイは逆らうことなくおとなしく従うと、へたり込んでいる母親を連れて2人からは距離を置いて介抱にかかることにした。

残されたのは父と長女。

どちらとも口を開かないのは、開こうとしないか、開けないかは、ごく明瞭なことだった。

そのまま沈黙は流れ、徐々に意識を回復させつつあるヴァレルヘリカの哀願にも似た眼差し。

彼は真摯に受け止める。

その真意を理解しているからこそ、レインは敢えて厳しく接しなければならぬことを。

「魔力の流れを感知して来たのか？」

こくり。

「目的はローレイなんだな？」

こくり。

「まだあの事を？」

……こくり。

ため息一つ。

やるせなかった。

レインもアルテリッシュも最初こそは娘の確執の理由がわからなかった。

しかしある時を境に、確執は確固たるものとなり、執拗にローレアイを狙い続けることとなる。

頭を悩ませていたが、やはり本人から聞くと余計に頭が痛くなる。

「仕方ないことだったんだ。それはお前も重々承知してるだろう」

ふるふる。

「だから今は俺達のことは忘れろ、いいな？」

ふるふる。

「母さんも気を重くしてる。シルターニヤに帰れ。ローゼスは……
…危険だ」

ふるふる。

「頼むよ、リカ」

「……………」

俯き、うなだれる。

見てはられない娘の姿。

それでもレインは言葉を紡ぐことだけは止めない。

「俺達の立場は知ってるだろう？世界的犯罪者の烙印を押されている。もう、一緒には居られないんだ」

「どうして」

「……………」

「どうしてあの時あたしを連れて行ってくれなかったのですか？」

不意に娘の面影がアルテリッシュと重なった。

成長したヴァレルヘリカは出会ったばかりのアルテリッシュによく似ているのは、嬉しくもあり、悲しくもあった。

まるで彼女が母親の気持ちを代弁しているようで。

「あたしも行きたかった。お父様と共にありたかったのに」

「リカ」

「あ、貴方は！あの愚妹だけを連れてあたし達から離れていった！」

「すまなかったと思っている」

「あたしは、あたしは！」

日が昇る。

陽光に照らされる2人の親子。

彼女の母親譲りの金糸のつややかな髪が揺れ、煌めいて見える。
素直に綺麗だとレインはもらす。

「……………」

だからだろう。

それっきりヴァレルヘリカが黙ってしまったのは。

しばらくしてローレイがアルテリッシュと手を繋いで戻って来る

と、3人は一度だけ抱擁を交わした。

惜しむように離れられなかったのはローレイ。

慈しむ母親に抱かれ、幸福に満ち足りた顔で2人は別れを告げる。

ただヴァレルヘリカのみが、1人佇んでいる。

太陽が昇りきった時には彼女1人が残され、声をこらえて泣いていた。

志願 けつい

いつも通りの街並み。

淡々と過ぎていく時間。

せわしない人たち。

賑わいを見せる広場には子供達のはしゃぎたてで遊びに耽って、輪になって誰一人外れることがない。

大人達は温かく見守り、自らの仕事にとりかかっている。

平和に包まれた風景。

楽しく、苦難無く毎日を送れる。

それがパリバート。

その名を聞けばほとんどの者が行ってみたいと言っだろう。

かつては堕ちた都市でありながら、現女王の恩恵に今では隆盛を極めて、多大なる権益を受けている。

市民は絶対的信頼を彼女に置いていた。

女王がいれば安泰だ。

幸せだと実感している人々。

剣となり盾となってくれる騎士や、兵士達。

警備隊も巡回をして、常に目を光らせている。

いざこざや犯罪も起きるが、すぐに対応がなされる。

ゆえに不安などなかった。

万事うまくいっている。

そう彼らは信じてやまない。

レックスは右往左往していた。

喧騒からやや離れた場所に、彼は腕を組み唸りながら歩いている。かと思えば突然立ち止まって、ぐしゃぐしゃと頭をかき回すと、盛大なため息をつく。

ちらほらと見える市民らはレックスの一挙一動に面白おかしく見守っていた。

時々、ちゃちゃを入れてくる者や応援してくれる者もいたが、だいたいは離れた場所で、楽しそうに笑っている。

彼がいるのは騎士団本部より50メートルほど離れた地点。

手には書類を持って、本部を見つめながら右往左往していたのだっ

た。

「よし、もう行かないとな！さすがにな！」

すたすたと本部へ進む足。
ぴたり。

「うう、緊張するなあ。入っていいんだよね？ああ、でも人とかい
っぱいいんだろうなあ……………」

すたすた。
本部から遠ざかる足。
ぴたり。

「いや、もう何回もこうしていて結局入っていないじゃん」

意を決する。

向かう先は騎士団本部

「でも、まだいいんじゃない……」

3歩進んで4歩下がる。

何度も何度も行っでは帰り、行っでは帰りを繰り返し。

「いや、本当にやらなきゃ。行っでこれを渡すだけなんだ」

「よっ！」

「何てことない、何てことない」

「おおー！」

「マジで緊張する……俺ってこんな根性なしかったのか」

「レックスくん？」

「くそう、手が震えてやがるぜ」

「……………」

「行かなきゃ行かなきゃ行かなきゃ」

「……………」

「よし！」

「無視すんなよお！！」

「うわあああああ！！」

背後からのわめき声。

すっかり1人の世界にいたレックスはいきなりのことに驚き、つい情けない声を上げてしまっていた。

手を挙げたまま固まってしまふ。危うく腰を抜かしそうになってしまった。

その際、手に持っていた書類がはらりと地面に落ちたが全く気付くことなく

「ん？何だこれ」

拾い上げたのはリカード。

先ほどからレックスに声をかけていたのも、わめいたのも彼である。書類を覗くと、見たことのある文字の羅列。

ごく最近リカード自身も手にしたことのあったそれは

「志願書じゃなか、これ」

末尾にはレックスの名が記されて、朱印も押されている。

つまりところ書類はレックスが騎士団に入団する志願書であり、すなわちそれはリカードと同じ騎士を目指すということ。

リカードはたちまち喜びを表して、固まったままのレックスの肩を揺さぶった。

「お、お前、騎士団に入るのか？入るんだよね？よし、行こうすぐ行こう！」

「……………」

強制的に連行されていくのをレックスはまるで記憶にはなかったと後に述べていた。

「確かに受け取りました。後はこちらで受理します。貴方に騎士の導きがあることを」

「ありがとうございます」

「あ、リカードさんですね？適正試験の日程ですが」

「そういえば……………受付さん、こいつと同じ日程にできる？」

「え、あ、はあ……………それは構いませんがよろしいのですか？明日にでも行えるのに」

「いい、いい。どうせ受かるには変わらんしね」

「ふふふ、わかりました。そう手配しておきます。貴方に騎士の導きがあることを」

「ありがとうございます」

終始、呆然と口が開きっぱなしだったレックス。

その場に居合わせたただけで、一連の手続きは隣にいた男が勝手に進めていった。

「え？」

ようやく意識が戻ってきたときには既に手にあつた書類は消えており、目の前にいる受付の朗らかな表情の女性が絶えない笑みを浮かべている。

「え？」

隣にいる男は上機嫌でレックスの肩を掴んではまたしても行動を促していく。

歩を進めていく2人はどこか仲のよい兄弟のように見えたのは、きつと誰もが思つたことだろう。

「ほら、受付は終わったから今日はもうこれだけだぜ」

「え……」

実感も何もなかった。

自身が手続きをしたわけではなく、また、いざやってみれば存外にも呆気ない。

志願者は基本的にその意志を尊重して全て受け入れていくのが、騎士団のモットーであり、適正試験も名ばかりで余程の事情がない限りは通るものらしい。

騎士団から出たりカードはそういった説明をきちんとしてくれたが、啞然としたままのレックスの耳にはいまいち入っていなかった。

しかし、リカードはそんなレックスを知ったか知らないか、どんどんと騎士団のルールや入隊してからすべきことを話していたが、結局はほとんどが独り言扱いだった。

「って感じだ、かなり分かりやすく説明してやったからな。覚えたら、覚えたよな！」

「あ、ああ」

2人の温度差はかなりある。

本来であればレックスも興奮しているところだが、リカードのせいによりまるで他人事に感じていた。

リカードのテンションは下がらない。

「お前も騎士団かあ。よっしゃ、頑張ろつぜ！目指すは騎士だ！」

「そ、そうだな」

「おいおい、どうしたどうした？元気がないなあ」

誰のせいだよ

レックスは突っ込みたかったが、そんな元気もなくわざとらしくうなだれて見せた。

「本当にどうしたんだ？ん、ってかお前はなんで騎士団に入んだ？」

「ああ、何となくだよ」

「またまたあ、正義感に強いお前のことだから、人助けのためだろ？わかってるわかってる」

反論をしてやりたかったが、見事にレックスの凶星をついたもので口ごもる。

適当にごまかすつもりが、一発で当てられるというのは、友人の理解かそれとも自身が単純なのか、喜ぶにも喜べない。

「しかし、お人好しというか何というか……」

「いいだろ、別に」

「もちろんだ、むしろ俺は嬉しいぞ」

「そっか」

レックスは笑った。

隣で肩を組む友人は、レックスにとって尊敬にも値できた。

誰かのためであろうとする精神。

かつて自己を救ってくれた恩人に対する恩返しは、他者、すなわち市民へと向けられる。

そうさせたのはやはり恩人ではあるが、今ではリカードは他者のために何かすることを当たり前だと思えるようになったという。

他人に恩を返すため、騎士団へと入る彼の瞳はそれこそ他人のためにある意志が伝わってくる。
眩しささえ覚えた。

「多くの人を助けられるんだな、騎士団に入ったら」

その瞳は輝き、本当に純粋なものだ。

リカードに会えたからこそ、レックスへの心に影響は与えられたのれっきとした事実。

「……俺も」

「どうした？」

「俺もみんなを守りたい、助けたい」

「……………」

少しだけ面食らったりカード。

レックスの瞳もリカードにはきつと輝いて見えたのだろう。

にんまりと笑みを向ける。

レックスも笑い返した。

「やろうぜ！」

「ああ！」

リカードの手がレックスの手を求めるように差し出される。

迷いなく握ると、力強く2人は互いの手をしっかりと握りしめた。

リカードの影響はもちろんのことだが、レックスが騎士団を志願したのには他の理由もあった。

毎日を怠惰に過ごし始めていたレックス。

やることもなく、しかし、資金面でもヴァレルヘリカからの援助で全く困ることがなかった。

だが同時にそれが引き金となったのは言うまでもない。

パリバートで仕事に就かなければならない。

レックスは一日中探し回ってみるも、意外というべきか、どこもかしこも首を横に振ってきた。

初めは疑問に思っていたが、さして気になるわけでもなく

再度そこら中を訪ねている内、騎士団募集の掲示板を見かけることがあった。

つい立ち止まって掲示板に貼られた紙に目を向けると
騎士団の人員不足が強調して記されていた。

辺りにいた市民が口を揃えて不安の声を漏らしては、立ち去っていく。
やはり守られる立場としてはこういった人員不足は市民に悪影響を
与えるもので。

だが市民が志願するわけでもなく、いやな悪循環が起きていた。

「みんな、何で自分が志願するとか言わないんだろうか」

困っているのは騎士団であり、市民が行動を起こせばいいのではない
か。

単純ではあるが確信をついた疑問が浮かぶが、レックスのすぐに自
分の考えが子供ということで納得させる。

「騎士団か……」

憧れではある。

正直なところ、入ってみたい気持ちがあるが、自分みたいな中途半
端な者が入るべきではないし、好奇心で入るのはよくないと考えて
いる。

きつと騎士団の者達は真剣だから、レックスは彼らに失礼をしてし
まうと。

「ママー、おなかいたいの？」

「……………う、ううん、大丈夫よ」

ふと背後から聞こえた声。
母と娘だろうか。

娘といってもおそらくは5歳前後の子供。
心配そうな顔で母親を見上げている。

母親はというと、随分辛そうな顔で必死に笑みをつくっている。

「ほんとう?」

「ええ、ごめんなさいね。さっ、行きましょう」

手を繋ぐ時、母親はもう片方の手で腹部を押さえていた。

苦痛に満ちているのをレックスは見逃せなかった。

「あ、あの……」

遠慮がちだが、声はしっかりと聞こえるように。

「は、はい……あら、あなたは」

どうやらレックスのことを知っているらしい。

母親は作りかけた笑顔を途端に歪めて、小さなため息をもらす。

「あの時はありがとう」

頭を下げた母親。

レックスに思い当たる節はなかったが、彼女の間違いというわけでもない。

「い、いえ」

とりあえずは何も言わなかった。

「それよりもお腹は……」

「あ、ああ、ええ。あの時ちょっと怪我してね、でも大丈夫よ」

「あの時………」

頭に閃くものがあつた。

過去の記憶はつい先日 of 出来事。

ライカンスロープ襲撃の件だ。彼女はその際に負傷した1人なのだろう。

そして、レックスに対して頭を下げるといふことは彼が体当たりをした時のことしかありえない。

「気に病まないでね。あなたがいなければわたしはもっと重傷……
うっん、下手すれば死んでいたかも」

「……………」

「ママ」

「はいはい、それじゃわたしたちはここで。本当にありがとう」

母親は再度頭を深々と下げた。ゆっくりと去っていくのをただレックスはぼんやりと見送っていた。

悔やみだろうか。

やるせなさだろうか。

拳を握りしめその場から動くことができなかった。

自らの考えの甘さ。

守られる者は弱く、助けを必要としている。

余裕など無くて当たり前なのだ。

レックスは己を責める。

直接的でないにせよ、彼は市民を無情と見なしていたから。
あんな優しそうな母親と小さな子供がか？

いや、違う。

2人はか弱く、とてもではないが守る立場にはなりえない。

子供がいる。

騎士団に入れば否が応でも子供とは会えなくなり、場合によっては
命の危険さえあるのだ。

殴ってやりたい、自分を。

同時に彼女たちを守ってやりたい気持ちが溢れ出した。

ただの自己満足かもしれないし、偽善かもしれない。

レックスはそれでもいいと思った。
自分にはできるかもしれない、家族のない自分なら失うものなどないから。

彼の決意は固まっていた。

もはや好奇心でも憧れでもなく、使命感としてレックスの意思は強くあったのだ。

「こちらを」

王座に腰掛けるのは誰でもない、ローゼス女王。

重厚な鎧を纏う彼女が僅かに身を動かす度、金属音がよく響いた。傍らには二歩ほど控えた騎士の姿。

こちらは随分と軽装をしており、砕けた格好をしていた。

腰には剣を差していて何故か似合っている。

王座にひざまずいている家臣が何かを献上している。

それは騎士団志願者のリスト。

パラパラと興味なさ気にめくると、彼女の指がある一点で止まっていた。

【レックス】

ファミリーネームのない名前。珍しくもなく、ありふれた名前ではあるが、何故かファミリーネームはないのだ。

年齢と誕生日、血液型……

女王の身体、鎧が大きく身じろいだ。

「どうかされましたか？」

「いや」

そう言って、彼女はリストを家臣へと返して王座から立ち上がった。

「騎士団長を呼べ。話があると」

声色は相変わらずに重なり合った重音ではあるが、どこか喜々とした感情を含んでいる。

誰も気付かない。

長年の臣下であり、友人であるシュヴァイゼンでさえも彼女の考えを読むことは出来なくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8098g/>

願いの先、想いの行方

2010年10月20日14時04分発行